
幻想郷から来た時鳥

ぎゃりこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想郷から来た時鳥

【Nコード】

N9197T

【作者名】

ぎゃりこ

【あらすじ】

何度も転生を繰り返してきたしでの鳥、時取纏静ときとりんせいは幻想郷の新しい住人を探し続ける。今回の生で尋ねたのは麻帆良。彼はここどんな出会いを果たすのか？

ブローグ

しでの鳥。ホトトギスの怪異。その特徴は三つ。

一つ、死なないこと。不死性を越える不滅性。その命が終わることはない。

一つ、托卵。普通のホトトギスが多種の鳥の巢に自分の卵を産み育てさせるのに対してしでの鳥は人の胎内に自らを宿し育てさせる。そうやって自らを繋ぎ続ける。

一つ、擬態。人と同じように生き、人と同じように暮らし、人と同じように喰い、人と同じように喋り、人と同じように死ぬ。

はるか昔からいくつもの時代を生き続けてきた彼はどのように生き、何を想い、どのように死ぬのか？

第一話　自己紹介

「今日からこのクラスの副担任になります。時取纏静ときとりてんせいといいます。これからよろしくお願いします」

それにしてもこのクラスはすごいな。なんていうか個性的な人たちがたくさんいるし。まあ、担任が一番個性的だが…。

「では、一時間目は時取先生へ質問する時間にしましょう」

隣に立っている担任、ネギ先生（10歳）がそう言うとな人の女生徒がメモ帳片手に前に出てきた

「はいはい。質問は私にお任せあれ。はじめまして時取先生。私は朝倉和美。先生のこと根掘り葉掘り聞き出しちゃうよ」

どこぞの烏と同じ匂いがするな。

「お手柔らかにお願いしますね」

「ではまず簡単なプロフィールを」

「名前は時取纏静。歳は25。身長は176センチ。体重は62キロ。これでいいですか？」

「オーケーです。次は趣味と特技を」

「趣味は怪異の蒐集。特技は小物作りですかね」

「ふむ、怪異とはなんですか？」

「簡単に言えば、妖怪とか不可思議な現象とかですね。鬼とか神隠しとかそういうものを調べるのが趣味です」

「なかなか個性的な趣味ですね。では次は皆さんお待ちかね。うちのクラスで気になる人は！？」

朝倉がそういった瞬間クラスのほとんどの人の目つきが変わった。いわゆる捕食者の目つきだ。

「そうですね。桜咲刹那さんですかね」

そう答えると「おおっ」という声にほとんどの人が桜咲を見る。桜咲は目を丸くして驚いている。やっぱり覚えてないか。

「なぜ桜咲さんを選んだんですか？」

「彼女は覚えてないようですが昔一度会ったことがあるんですよ」

「なるほどなるほど。それじゃあ次は……」

かなり多くの質問をされたんだが意外に早く終わったな。時間もまだあるし。

「早く終わっちゃいましたね。それなら時取先生の話でも聞きましたようか」

隣にいるネギ君が話しかけてくる。それにしても俺の話か。話せることと言ったらやっぱり怪異のことしかないな。

「じゃあ、詳しく知りたい怪異がある人は手を上げてください。出来る限り答えましょう」

そう言うどちらほら手を上げる人がいる。ネギ君に名簿を借りて名前を呼ぶ。

「じゃあ、マクダウエルさん」

「吸血鬼について」

名前を呼ぶと短くそう返してきた。

「吸血鬼ですね。吸血鬼は文字通り吸血を行う怪異です。吸血鬼の吸血には二種類あります。一つは食事を目的にしたもの。もう一つは眷族作りを目的としたもの。食事の場合はそのまま肉体も食べてしまいます。ほおっておくと眷族になってしまいますからね。また吸血鬼は高い再生力と身体能力を持っています。マンガなどでよくあるように自らの体を蝙蝠に変えるなど変身能力も持っています。これだけ聞くとものすごく強そうですが弱点も多くあります。日光や銀の十字架、ニンニク、聖水。他にも呼吸器系、内臓器官を攻めることや毒も有効であると言われています。まあ、普通の人間には難しいですが。ここまでで何か質問はありますか？」

そう言う一人手を上げた。名簿で名前を確認して呼ぶ。

「長谷川さん」

「眷族になってしまったに人が元に戻る方法はあるんですか？」

「次で言うつもりだったんですが先に言われちゃいましたね。方法ですが一つだけあります。本来主人に従うべき従僕が、逆に主人に害をなした時、その主従関係は崩壊し、従僕は従僕足る資格を剥奪されると言われています。つまり、自分を吸血鬼にした相手を倒せば元に戻るんです。倒せるかどうかは別ですが…。またマンガなどによくいるヴァンパイアハンターですが主に三種類に分けられます。一つ目は吸血鬼。いわゆる同族殺しですね。彼らは吸血鬼の能力を使い吸血鬼と戦います。二つ目はハーフヴァンパイア。ダンピールとも言いますね。彼らはハーフゆえに吸血鬼の弱点はありません。その代わり能力も半分です。彼らは吸血鬼の能力と共に銀の十字架や聖水など吸血鬼の弱点になる武器を使ったりして戦います。三つ目はいわゆる専門家。日本で言う陰陽師ですかね。有名なものですとエクソシストですね。彼らは主に先ほど言った吸血鬼の弱点を使って戦います」

周りを見て他に質問がないことを確認してからマクダウェルさんに聞く。

「これくらいいいですか？マクダウェルさん」

「ああ、充分だ」

そう彼女が答えると丁度鐘が鳴り授業を終了した。

放課後歓迎会をしてもらったが好きかって騒いだ拳句ほとんどの奴が片づけをせずに帰った。

「ごめんな〜時取先生。片付けさせてもって」

「あいつら好き勝手騒いどいて片づけしないんだから」

「かまいませんよ。近衛さんに神楽坂さん。この程度ならまだ可愛いものです。僕の知り合いなんか好き勝手騒いで酔ってない人を片っ端から酔い潰していくんですから」

たとえば鬼とか鬼とか鬼とか鬼とか…。

「あははは…」

「それはきついわね」

さてこれで終わりだな。

「じゃあ二人ともまっすぐ帰って明日遅刻しないように」

「はい」

さて俺もさっさと帰るか…。

桜通りの見事な桜を見ながら帰る。ふと、顔を上げると見事な満月があった。

「綺麗な月だな…」

「そうだなこんな日には血が飲みたくなる」

振り返るとマクダウェルが黒いとんがり帽子とマントをつけた姿で立っていた。

第二話　吸血鬼としての鳥

「こんにちは、マクダウエルさん」

後ろに立っていたマクダウエルに話しかける。

「こんにちは、時取先生」

「悪いけど少しだけその血を分けてもらつよ」「

マクダウエルの言葉と自分の言葉が重なる。

「!？」

顔には出さないようにしているがかなり驚いたようだ。

「くくっ」

「なぜ私の言うことがわかった？」

また二つの声が重なる。

「ちっ、来い茶々丸」

「yes、master」

マクダウエルの呼びかけに何処からともなく絡繰が出てきた。

「こんにちは、絡繰さん」

「こんばんは、時取先生」

さてこれからどうなることやら。

私の目の前には今日赴任してきた時取纏静がいる。こいつは強い。敵意がないから計画の邪魔にはならないだろうがほっといて肝心なところで邪魔をされると困るからな。しかしどうして私の考えが…。

「先生にはいくつか聞きたいことが…」

…よし糸であいつの口を縫い付けよう。

「怖いのでやめてください」

読心術でも使っているのか？

「質問に答えるのはかまいませんがこちらでも聞きたいことがあるのですが」

「私の質問に答えてからだ」

まずは正体を聞くか…。

「僕はホトトギスの怪異です」

ちっ！

ほんとにイライラさせる。

「人の考えを読むのはやめろ」

「わかりました。それでは次の質問は？」

「何しに麻帆良に来た？」

「怪異の蒐集のためです。こついう土地には怪異が現れやすいですから」

怪異ね。魔法使いのように正義に固執しているようではないな。こちら側に引き込めるか？

「先生。ちょっと私に協力してくれないか？」

俺は今マクダウエルの家に招待された。何でも協力してほしいことがあるとか。

「で、協力してほしいことは？」

絡繰が入れてくれた紅茶を一口飲んでから聞く。うまい。

「私に掛けられた呪いを解くのに協力してほしい」

「呪いねえ……」

「ああ」

紅茶をまた一口飲み考える。

呪いなら何度か解いたことはあるけど、いつものやり方で解けるだろうか？

「それなら解けると思います…」

「なんだと！？本当か!？」

「準備に時間が掛かると思っけど解けると思いますよ」

「サウンドマスターが力任せに掛けた呪いだぞ!？」

「僕のやり方は魔力とか関係ありませんから」

「それはどういうことだ？」

「真名。侵入者はどこだ」

「前方600メートルの所。ん、なんだ？」

「どうした？」

「侵入者が召喚した鬼が侵入者を捕まえてこちらに向かってくる」

「はあ？」

意味がわからない。制御できずに鬼が暴れることならあるかもしれ

ないが術者を捕まえるだと。どういうことだ？ 罠か？

「見る限り敵意はなさそうだ談笑しながらこっちに来る」

「…この場合どうすればいいんだ？」

「とりあえず、話し合いでもすればいいんじゃないか？」

そうこう話しているうちに鬼が私たちの前にやって来た。

「嬢ちゃん達、ちょっと聞きたいことがあるんやけど」

「何の用だ！」

剣を構えながら聞く。

「ああ、儼らは戦うに來たわけやないのや。ほら召喚者も渡すからの」

そう言つて縄で縛つた召喚者をこちらに渡してくる。

「じゃあ、何しに來たんだい？」

「人を探し取るんや。時取…今は…「纏静です。オヤビン」そうや
そうや時取纏静つて男がここにいるはずなんやけどな。嬢ちゃん
ち知らんか？」

時取先生？

やり方はそのうち話すか…。期待しないで待つとしよう。

「マスター」

「どうした茶々丸」

「学園長からお電話です。」

ジジイから？こんな時間に何の用だ。

「ジジイ、なんか用か？」

「エヴァンジェリンかの？今から世界樹前の広場に来て欲しいのじやが」

「なぜだ？」

「君のクラスの副担任についての話があるんじや」

「先生なら今私の家にいるが」

「むっ？なら彼も連れて来てくれ」

「いいだろう私も丁度話したいことができたところだ」

「なるべく早く来てくれ」

ガチャ。

くくく、面白いことになりそうだ。

「こんな夜中にどうしたんですかみなさん？花見でもするんですか？」

マクダウェルに連れられ広場に向かった。何でも学園長が俺と話したらしい。俺のことばれたかな？

広場に着くと学園長の他にも結構な数の先生と生徒もいた。

「フオッフオッフオ。それはまた今度にするかの。今日は君に聞きたいことがあるんじゃない」

「なんですか？」

「君は鬼という存在についてどう思うかの？」

「鬼って漠然と言われてもな。俺の知っている鬼は、嘘が吐けない酒が好きな気のいい奴たちですけどそれが何か？」

そう言うとなりの人達が少しばかりざわついた。

「口調が変わったのう」

「プライベートな話みたいだからな」

「実はその鬼から言伝を預かっておるんじゃない」

「そうか。あいつらはなんと？」

「郷に一人住まわせたいものがある、と言っておったそうじゃ」

郷にか、後で式を送らないとな。

「話はそれだけですか？なら寮に戻りたいんですが？」

「待ちたまえ」

彼は確か…。

「なんだ？ガンドルフィーニ先生」

「君は何者なんだ。鬼のような化け物どもとなぜ交流があるんだ？」

化け物…ね。

「少なくとも卑怯な手段で彼らを追い出した人間よりは好感が持てますよ」

「なんだと」

「それに僕も妖怪です」

そう答えると周りの先生生徒たちが騒ぎ出した。が。

「静まれいっ！！！」

学園長の一喝で静かになった。

「…妖怪となるとお主はなんなのかのう？」

「俺はしでの鳥。はるか昔からいくつもの時代を渡り生きてきたホトトギスですよ」

時取は時鳥。纏静は転生。つまり転生を繰り返すホトトギス。時取纏静はしでの鳥になるべくして生まれた男。

「お主の目的はなんじゃ？」

「人と妖怪の共存」

「なら麻帆良の者たちと敵対するつもりはないんじゃない？」

「友が傷つけられない限りは」

静寂が辺りを包む。

「……………うむ、あいわかった。話はこれで
終わりじゃ」

「それでは」

踵を返し寮へと向かう。

「それでは開さ「ちょっと待てジジイ」なんじゃエヴァンジェリン」

「奴に呪いを解いてもらうことになった」

私がそう言つと魔法使いどもが騒ぎ出した。ジジイだけは騒がず返してきた。

「解けるのかの？」

「奴が言うにはな」

「そうか、うむわかった」

さて、騒いでる魔法使いどもは無視して帰るか。くくっ、正義の魔法使いがどう動くか見ものだな。

第三話〈魔法使いとの敵対、生徒との和解〉（前書き）

感想ありがとうございます。

第一話のハーフヴァンパイアの所をほんのすこーし書き加えました。

第三話　魔法使いとの敵対、生徒との和解

学園長たちと話した次の日の夜。魔法使い達に囲まれた。

「何の用だ？」

先頭に立っているガンドルフィーニに訊ねる。

「君をこの学園から排除する」

「それは学園長の命令か？」

「いいや、私たちの総意だ」

「そうか」

確認を取りながら周囲を確認する。あれは桜咲と龍宮か。龍宮は桜咲に頼まれて仕方なく来ているようだな。

「（このちゃん）」

夕風を強く握りしでの鳥と名乗った私たちの副担任を見る。すると

「面白いことになってるじゃないか」

いつの間にか来たエヴァンジェリンさんが話しかけてきた。

「いいのかい？あのままじゃ呪いを解けなくなるかもしれないよ？」

龍宮がエヴァンジェリンさんに話しかける。

「かまうものか。あいつが本当にしでの鳥なら誰もあいつは殺せないよ。むしろ、あの余裕ぶった顔が歪むなら見てみたいものだ」

エヴァンジェリンさんはしでの鳥のことを知っているのか？

「その言葉からするとしでの鳥について知っているみたいだね。よければ教えてくれないかい。昨日調べたんだが全く分からなくてね」

「無理もない。かなりマイナーな妖怪だからな。しでの鳥は生きることだけに特化した妖怪だ。その一点に関してのみどの妖怪よりもすぐれている」

「そんなにすごいのかい？」

「すごいというよりよくわからん」

ということだ？

「しでの鳥は人に擬態し、人の胎内に托卵する。そうして自信を繋いでいく。人のように生まれ、人のように生き、人のように死ぬ。だが、寿命以外では死なない。よっぽどのことがない限り自身が妖怪だと気付かない。ほんとよくわからんよ」

人間を襲うでもなくただ生きるだけの妖怪。

「まっ。俺自身よくわかってないからな」

「「!?!」」

いつの間に!?! 周りの人達もなぜ気付かない?

「周りの奴らは簡単な幻術にかかってもらってる」

「各個撃破というわけか」

龍宮が銃を抜きながらつぶやく。私も夕風をすぐ抜けるよう構える。

「いやいや随分と物騒だな。せつかく話し合いに来てるのに」

「信じられるかつ!」

「そこは信じとこうよ。まったく昔は可愛かったのになあ」

私がかわっ!?!

「うるさい! 私はあるあなたなど知らない!」

「いやいや、お前を近衛家に連れてったのは俺だぞ?」

「へっ?」

確かに里を出た時誰かに拾われたが…。

「うわっ。本気で忘れてるよ」

「刹那…」

「うるさいっ！しっかりと顔を見る前にどっかに行ってしまったんだ。その人の言葉以外覚えてない！」

確か…。

「「幻想郷は全てを受け入れる。もしまた一人になったらいつでも連れて行ってやる」だったけ？」

「！！」

構えを解く。

「刹那？」

「本当にあなたが？」

「まあ、そうだな」

頭を下げる。

「おい、どうして「ありがとうございました」…」

ずっと言えなかった言葉。この人のおかげで私はこのちゃんに会えた。

「龍宮。私は先生の方へ着くよ」

「なら私も先生に着くよ。刹那に雇われている身だしね」

「私たちも手を貸してやろう。行くぞ茶々丸」

「なっ!？」

ガンドルフィーニが驚きの声を出す。まあ、ずっと話していた相手
がいつの間にか仲間を増やしてたらそうなるか。まあ、もう少し驚
いてもらうかな。スキマを開く。萃香が魔理沙あたりが面白そうと
か言って出てくるだろう。そう考えていると

「わはー」

「お久しぶりです。時取さん」

予想外の二人が出てきた。

第四話　幻想の弾幕

「わはー」

「お久しぶりです。時取さん」

時取が空間を割いたと思ったら中から二人の人物が出てきた。一人は腕を横に広げてふわふわと浮かんでいる金髪の少女。もう一人はメイド服を着た銀髪の女。小さいほうからは人の気配がしないおそろく妖怪か。それにあのリボンは封印か？銀髪の女は隙が見えないそれに武器をいくつか隠しもっているようだ。こいつらが幻想郷とやらの住人か？

「久しぶりだな二人とも。でもなんでお前らが？」

ルーミアと咲夜が来た。ルーミアはともかく咲夜が怪しいスキマに入るとは思えないのだが。

「おいしそうな匂いがしたのだー」

「お嬢様が面白い運命が見えたと言っていたので」

まあ、納得の理由だな。

「ちょっと手を貸してくれ」

「なんなりと」

「それよりあの人たちは食べてもいい人間？」

ルーミアは相変わらずだな。

「食べてはいけない人間。手伝ってくれたらいつもの食べさせてあげるから」

「そーなのかー」

「とりあえず、周りの人達を殺さないように適当に動きを止めてくれ」

「わはー」

「わかったわ」

そういうとルーミアは右側、咲夜は左側の魔法使い達に向かいあった。桜咲たちもそれぞれ二人のサポートに回った。

「さあ、魅せてやろうたった一人の百鬼夜行を…まあ、耐えられるならな」

ポケットからカードを一枚出して呟く。

「虚偽「囲い火蜂」」

「咲夜とあったか。私たちが手を貸そう」

ナイフを構えるメイドにそう声をかける。

「あなたは？」

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル。真祖の吸血鬼だ。こ
っちは従者の茶々丸だ」

「絡繰茶々丸です」

「私は紅魔館でメイド長を務めさせていただいております。十六夜
咲夜と申します」

ピクッ

「紅魔館？…そうかあいつらの従者か」

「お嬢様を知っているのですか？」

懐かしいな。

「昔の遊び相手だ。咲夜、後で我が家に招待しよう。レミリアたち
のことを聞かせてくれ」

「喜んで参りましょう。お嬢様たちへのいい土産話になります」

「それならさっさと終わらせるか」

「そうですね」

そういうと咲夜がカードを取り出しつぶやいた。

「幻符「殺人ドール」」

ルーミアさんの助太刀に来たんだが…。

「わはー」

無数の攻撃魔法を軽々と避けていく。

「そんなんじゃないぞー」

空を自由に飛びながら様々な光と踊るように避けていく。

「綺麗…」

自然と口から零れた。

「それじゃあ今度はこっちの番よ」

彼女はポケットからカードを一枚出すところ呟いた。

「月符「ムーンライトレイ」」

「虚偽「囲い火蜂」」

無数の蜂の形をした弾幕が魔法使い達を囲み無数の針を放つ。その針を受けた魔法使い達が高熱により次々と倒れていく。

「幻符「殺人ドール」」

無数のナイフが魔法使いたちに襲いかかる。ある者は自らの武器を弾かれ、ある者はナイフで地面に縫いつけられる。

「月符「ムーンライトレイ」」

二つのレーザーに挟まれ逃げ場を失った魔法使いが次々放たれる弾幕を避けきれず倒される。

「お前達に教えてやろう。恐怖をから生まれた妖怪も信仰から生まれた神もそれを生み出した人間でさえも俺は殺せない。俺を殺せるのはこの無慈悲なる時の流れのみ。そして、その流れが新たな俺を生む」

「私の手品はどうだったかしら。本当の手品にはタネも仕掛けもないものですよ」

「光り強ければ強いほど闇は大きく在れるものって纏静がいつてた」
倒れた魔法使い達にそれぞれが言葉を残す。

「
「
「
「
（私たちなんにもしてない…）」
「
「
「
「

第五話　幻想郷縁起

「りゅめきゅ。」

「……………」

魔法使い達を倒して今はマクダウェルの家にいる。

「りゅりゅ。」

「……………」

だけど誰も何も話さない。どうしたんだ？

ちゅーちゅー。

「…おい」

やっと口を開いたか。

「なんだ？」

「左腕は大丈夫なのか？」

…あゝそういうことか。向こうでは当たり前だったからな。

「大丈夫だ。」「ぶはあ。」「馳走さまなのだー」「この通りすぐに生えるから」

今まで左腕を覆っていた闇が晴れるとルーミアが満足したようである。そのまま寝っ転がる。そのルーミアの口についた血を咲夜がハンカチで拭き取る。

「さてと、それじゃあ話を始めるか。なにから聞きたい？」

そう聞くと龍宮が手を上げ聞いてきた。

「まず、幻想郷について聞きたいんだが……」

「簡単にいえば人と妖怪が共に住む箱庭だ」

山奥にあった人と妖怪の隠れ里を結界によって隔離させた場所が幻想郷。人と妖怪が共に住むと言っても問題があった。ほとんどの妖怪が持つ本能。つまり戦闘本能。これを解消するためにある決闘方法が生まれた。弾幕ごっこ。正式名称スペルカードルール。人間でも妖怪でも妖精でも神でも対等に戦えるようにするルールだ。今で言うシューティングゲームだ。避けることに重点を置いたな。このルールのおかげで妖怪は人を襲わなくても力を保てるようになり、人間も、といってもごく一部の力を持つ人間だけが妖怪が起こした異変を自分たちで解決できるようになった。それと幻想郷の住人は能力を持つことがある。「〆程度の能力」と俺達は呼んでいるが、闇を操る程度の能力や時を操る程度の能力のように戦闘に使えるものから春を伝える程度の能力や手足を使わずに楽器を演奏する程度の能力のように戦闘にまったく使えないものまで様々だが応用がかなり効くから幻想郷の実力者はほとんど能力持ちだ。昔はそうでもなかったんだが今では幻想郷以外で能力を持っている奴を見たことがないな。

「幻想郷についてはこれくらいか」

うん。やっぱり茶々丸の紅茶は美味しいな。咲夜の入れる物と同じくらいうまい。

「お前のことを教える」

全く偉そうだなこのちびっ子は。俺のこと…確かスキマに幻想郷縁起があつたな。

「ちょっと待てよ……あつたあつた。ほれ」

スキマから出した幻想郷縁起を出す。

「幻想郷縁起？」

「幻想郷の実力者のことをまとめたものだよ。咲夜とルーミアのことも書かれているから」

ペラッ

紅魔館のメイド

十六夜咲夜（いざよいさくや）

能力 時間を操る程度の能力

危険度 低

人間友好度 高

主な活動地域 紅魔館

紅魔館のメイド長を務める紅魔館唯一の人間。メイド長といっても彼女以外のメイドは全て妖精であり、主に自分のことだけで手いっぱい。ゆえに紅魔館の仕事の九割九分九厘を彼女一人で行っている。

能力

時間を操る程度の能力を持っている。人間が持っている能力にしては最大級の強力な能力である。時間を操る彼女の力でも時間を戻すことはできない。せいぜい移動していたものを元の場所に戻す程度である。また、時間と空間には密接な関係があり彼女は応用で空間も操ることができる。紅魔館の中が外見以上に広いのはそのためである。

目撃報告例

・宴会の時は助かるわね。準備から片づけまで完璧だから。どっかの白黒とは違うわ。（博麗霊夢）
流石メイド長である。

・いきなり後ろに立たれると心臓に悪いぜ。音も気配もないんだから。（霧雨魔理沙）

あなたが本を盗まなければいいのでは？

対策

紅魔館に敵対しない限り敵に回ることはないだろう。万が一機嫌を損ねるようなことをしてしまったら珍しいものをあげるといいだろう。彼女は珍品を集めるのが好きらしい。

宵闇の妖怪。

ルーミア

能力 闇を操る程度の能力

危険度 高

人間友好度 普通

主な活動地域 博麗神社（時取纏静のいる場所）

妖怪ではかなり強い部類に入る妖怪。妖力の多さだけなら時取纏静に次ぐ多さである。彼女は時取纏静との付き合いが長くよく彼の腕を食べている姿がよくみられる。（１）

頭のリボンは封印で強すぎる力を時取纏静が押さえるためにつけたものらしい。

一人でいるときは常に闇を纏ってふよふよと当てもなく飛んでいる。

能力

文字通りの闇を操る能力である。基本的には自らが出した闇を纏っているところしか見たことがない。彼女が言うには影も操れるらしい。

この妖怪に纏わる逸話

・常夜異変

幻想郷が数日間夜が明けなかった異変。彼女が言うには寝ている間勝手に闇が出たとのことらしい。おそらく制御しきれなかった妖力が漏れ出したのだろう。時取纏静がリボン型の封印をつけてからはこんなことはなくなった。

目撃報告例

- ・たまに纏静が腕に闇をつけて歩いてることがあるけどあれは何をしているのかしら。（博麗霊夢）
 - ・おそらくは彼女がお食事中だったのだろう。
 - ・あいつの闇の中はひんやりして気持ちがいいんだ。（霧雨魔理沙）
- 闇の中は涼しいらしい。

対策

彼女が空腹の時に会おうと問答無用で噛みついてくる。何か食べ物をあげれば簡単な頼み事は聞いてくれる。常に食料を携帯しておくといいだろう。

- （１）妖力が多いのはおそらくこのためだと思われる。

自称限りなく人間に近い妖怪。幻想郷創始者。幻想郷最強。人妖継想神。

時取纏静（ときとりてんせい）

能力 ありとあらゆるものを受け継ぐ程度の能力

危険度 極低（ 1 ）

人間友好度 極高

主な活動地域 博麗神社

幻想郷のもととなる隠れ里を作った人。幻想郷最強の人物。人間と変わらない姿をしているがその正体はしでの鳥という妖怪。ホトトギスの妖怪で簡単に言えば転生を繰り返す寿命以外で死なない人間らしい。（ 2 ）

外の世界の妖怪や半妖、人間をスカウトに行くことが多く幻想郷にすることはあまりないが幻想郷で誰かの死期が近づいた際は必ず戻ってくる。誰かが死ぬとき彼はその人の想いを受け継ぎその人の家族や友人にその想いを伝える。人も妖怪も関係なく想いを受け継いでくれるので人と妖怪どちらからも信仰され人妖継想神と呼ばれている。（ 3 ）

幻想郷にいる間は基本的に博麗神社でのんびりしている。

能力

文字通りの能力である。彼によると能力でさえも受け継ぐことができるらしい。幻想郷のほとんど能力は使えるらしい。（ 4 ）また才能や技術も受け継いでるため基本的に何でもできる。

この妖怪に纏わる逸話

・外魔異変

数千人単位の外来人が幻想郷に攻めてくるという異変。彼が言うには彼らは外の世界の自称正義の魔法使いだったらしい。何でも幻想郷を化物の巣窟だと決めつけて襲ってきたようだ。当時から生きてきた妖怪の話によると

・ 鬼だ。鬼がいた……。 (ある鬼)

どうやら鬼さえも恐れるほどの戦いっぷりだったらしい。

・ あの時の彼はすごかったわ。ぞくぞくしちゃった。また戦いたいわ。 (風見優香)

大妖怪と戦いながら数千人の魔法使いを相手に戦える彼は限りなく人間に近い妖怪とは言えないんじゃないだろうか。以上のことから幻想郷最強の称号は間違いないようだ。

目撃報告例

・ 纏静がいる間はいいわね。参拝客も来るしおいしいご飯も食べれるし。 (博麗霊夢)

幻想郷にいる間彼は博麗神社にすることが多い。そのため彼がいる間は人妖問わず参拝客が多い。頼めば外の料理を作ってくれることもある。

・ 毎回違うスペルカードを使ってくるから何度挑んでも楽しいぜ。

(霧雨魔理沙)

妖怪や怪異を模したスペルカードをよく使う。彼が言うには対処法を知っている人ならば通常の弾幕以上に簡単なものもあるらしい。

・ 纏静の腕は美味しいのだ！。 (ルーミア)

宵闇の妖怪に腕を上げている姿が度々目撃されている。彼が言うには丁度食料を切らしてたかららしい。だからと言って腕を上げるのはどうかと思う。

・ 宴会の途中でいつも一人酒を始める。その時の纏静はなんか近寄り辛い。 (伊吹萃香)

彼は最古の妖怪だ。何か思うことでもあるのだろう。

・ 彼だけです。私の話をちゃんと聞いてくれるのは。 (四季映姬・

ヤマザナドウ)

転生を繰り返すたびすっかりとありがたい言葉を受け取っているらしい。

対策

対策も何も、誰にも倒せないし、よつぽどのことがない限り誰に対しても友好的である。頼まれごとと大体のことは引き受けてくれる。もし敵対することになったら覚悟した方がいい。彼を敵に回すということは幻想郷の全ての人物を敵に回すということだ。まあ、そんなことする人は幻想郷にはいないだろうが。

(1) 向こうから攻撃してくることはあり得ない。

(2) かなりマイナーな妖怪らしい。本来は無自覚なため本人も自身が妖怪だと気付かない場合がほとんどらしい。

(3) 本人は納得してないらしいが彼以外の全員が納得している。

(4) 能力によっては本人のように使えないものもあるらしい。

彼が多く使用する能力ほどうまく使えるみたいだ。

パターン

「チートめ」

「チートだね」

「チートですね」

「チートかと思われます」

「ひどくない？」

第五話　幻想郷縁起（後書き）

この世界での幻想郷では元から人間と妖怪が共に住んでいたので人間友好度は高めです。

スぺルカード説明

虚偽「囲い火蜂」

紅い蜂型の弾幕で敵を囲む。その蜂から針型の弾幕を放つ。基本的
に隙間が多く空いてるのでさほど難しくもない。任意によって弾幕
に当たった相手を高熱にすることができる。

第六話　スキマ

学園長室

纏静に返り討ちにあつた魔法使いが集まっていた。

「学園長！即刻彼を排除すべきです！」

「穏やかじゃないのう。彼によつて西の妖怪による被害が減つたんじゃないぞ？なぜ彼を排除しないといけないんじゃない？」

事実纏静が来てからの妖怪を使つての襲撃はほぼ零になった。

「彼は危険です！内側から崩すために西から送られた刺客に決まつてます！」

「うふふふ。なかなか面白いことを言ってますのね？あんな人が西にいたら内側から崩す必要ないじゃない」

そこにいたのは日傘をさし扇子で口元を隠して笑う少女の姿が。

「君は誰かの？」

「八雲紫。あなたには妖怪の賢者と言つた方がわかりやすいかしら？」

「もしか幻想郷の……」

「そうあなた方が滅ぼそうとした幻想郷の住人です」

「で、その妖怪の賢者が何の用かの？」

「何も分かってない彼らに忠告をと思いまして。彼を排除するなんて不可能なことをしようとしてる彼らにね」

「不可能だと？」

八雲紫の言葉に怒りをあらわにする魔法使い達。

「ええ、不可能ですわ。この世の誰にも彼を殺すことなんてできませんわ」

「馬鹿馬鹿しい。たかが妖怪程度に後れを取る我々ではない」

「そう言って幻想郷に攻め込んできた数千人の正義の魔法使いを誰一人殺さずに追いついたんですよ？彼は妖怪風見幽香と戦いながらね」

「風見幽香だと！？」

「フラワーマスターは死んだんじゃないのか！？」

かつて魔法使いを苦しめていた風見幽香の名に魔法使い達が騒ぐ。

「そんな話嘘に決まっている！」

「わたしたちが負けるはずがない！」

魔法使いが声を荒げる。自分たちが信じている正義に縋りながら。

「なら、あなたたちは不死者を殺せますか？あらゆる方法を使いその者の魂さえも消滅させることができますか？彼を相手にその方法が使えますか？出来るのならぜひ試してください。死が彼を受け入れようとした瞬間…」

八雲紫の扇子が閉じられ彼女の笑みが消える。

「幻想郷の全てがあなたたちの存在を否定します。人々に忘れ去られた幻想があなた達を無に変えます」

エヴァ宅

「それじゃあそろそろ二人を幻想郷に送ろうか」

纏静がスキマを開けると紙が落ちてきた。

「なんだこれ？「結界の調整のためしばらくの間幻想郷を完全に隔離します。その間二人のことよろしくね。ゆかりんより」…おい、スキマ」

スキマに手をつ込み八雲紫を捕まえる。

「何よ。これから結界の調整で忙しいの」

「お前が結界の管理を全部藍に丸投げしてるからだろ。帰るついでに二人も連れてけ」

「だめよ。これ以上私以外が通るとややこしいことになるもの。ちやんと二人の周りの人から許可はもらってるわよ。まずはルーミア」

紫がスキマから数枚の紙切れを出して言う。

「わたしかー？」

「慧音から「これを機により一層勉強に励んでくれ。しっかり纏静のいうことを聞くんのだぞ」だそうよ」

「わかったのだー」

「あとチルノから「なんかよくわかんないけどあたいたらさいきよーね」…じゃあなんで書いたのかしら？」

「わはー」

他の皆は苦笑いをしている。

「次に咲夜」

「みんなはなんと？」

「まず中国「紅魔館のことは任せてください。しっかり守って見せます」寝てるのを起こして書かせたわ」

「中国：帰ったらお仕置きね」

さて咲夜さんその手にあるナイフは一体何に使うつもりですか？後いい加減名前と呼んであげてください。中ご…美鈴が可哀そうです。

「次にパチユリー」「帰ってくるときにそっちの魔術書をいくつか持って来て頂戴。あと中国のことは小悪魔に任せたから」「小悪魔からは「何やつても起きないんですけどどうすればいいんですか?」「」

「このナイフを小悪魔に」

力いっぱい握っていたナイフを紫に渡す。

「次にフランドールから」「外の話いっぱい聞かせてね」「」

「フランお嬢様……」

「最後にレミリア」「外の世界に行くにあたってあなたに二つの仕事を与えるわ。一つはメイドとして纏静に使えること。彼に付き添い様々なことを学びなさい。二つ目は必ず無事に帰ってきなさい。あなた以外で今魔館のメイド長が務まる人なんていないのだから」「」

「お嬢様……必ず戻ると伝えてください」

「わかったわ。最後に纏静。霊夢からよ」

「霊夢から?」

俺にまであるのか?

「「わたしの食費が尽きたわ。速く帰って来て」だって」

「お前が何とかしろ」

「わかったわよ。…ああそれとその二人は学校に通うことになるから」

「そーなのかー」

「わかりました」

「おい待て、学費やら生活費やらは誰が払うんだ？」

「あなたに決まってるじゃない。ああそれと三人に丁度いい仕事も学園長からもらったからそれで何とかしてね」

このスキマは人の都合を考えず次から次へと。

「住む場所はどうするきだ？」

「この近くの土地が使えるようになったから。あなたなら家の一軒や二軒簡単でしょ？」

俺が怒らないとでも思ってたのか？

「わかった。もうないだろうな。さっさと戻って結界の調整を始める。二度と俺の前に現れるな」

「つれないわね。あつとそうだ」

「なんだ？」

落ち着け俺。これは紫の作戦だ。俺を怒らせて冷静さを欠くつもりなんだ。

「結界の調整手伝ってくれない？」

ブチッ！

「人が大人しくしてればいい気になりやがってこのスキマババア
アアアアアア！！！！！妖刀「心渡り」！！！！！！」

スperlカードを発動し一本の刀を振りかざす。

「ちょっとしたお茶目じゃない！ちょっとその刀本当に危ないんだ
って！ああもう、それじゃあまたね！」

「はあはあ」

刀を消しソファに座る。

「時取さん。胃薬です」

咲夜がいつの間にか胃薬を用意していた。それを飲み呷く。

「…俺も従者欲しいなあ」

主に紫を追い払うために。さてと家を作らないとな。

第六話　スキマ（後書き）

スペルカード説明

妖刀「心渡り」

鉄血にして熱血にして冷血の吸血鬼の怪異殺しから受け継いだ妖刀。妖怪相手に絶大の攻撃力を誇る。

第七話　対話

「かくかくしかじかということとで今日からこのクラスの仲間になる十六夜咲夜とルーミアだみんな仲良くなー」

「かくかくしかじかじゃわかんないよ時取先生！二人との関係は！？後なんかキャラ変ってない？」

全くそういうことは察してくれよ。俺だって忙しいんだ。

「一度しか言わないからよく聞けよ。知り合いの自己中心的ではた迷惑な奴が自分の仕事をしっかりしないために其のつけが回って来てそのせいで一時的に二人が帰れなくなり昔からの知り合いだった俺にこちらの都合も考えず預けついだからと学校に通わせることになった。二人の住むところだが森の方にある家を借りて昔から交流のある俺と一緒に生活することになった。キャラが変わってるのはここ最近素で話すことが多くなって敬語と使い分けるのがめんどくさくなったので今日からこのままでいく。二人の席は一番後ろの列だ。マクダウェル。二人にいろいろ教えてやってくれ。俺はこれから学園長と二人のこととでいろいろと話があるから一時間目の俺の授業は二人への質問の時間にする。ネギ先生それじゃあ後は頼みます」

はあーめんどくさい。

学園長室

「はあー」

エヴァの呪いに時鳥君と幻想郷の二人。問題が山積みじゃのう。

コンコン

「時取です」

「入りなさい」

問題なのは彼らじゃなくて我々じゃがの。

「二人のことありがとうございます」

「いいんじゃないよ。それより聞きたいことがあるんじゃないか」

「なんだ？」

「なぜ君は普通の教師としてここに来たんじゃ？魔法先生としてくればいろいろと都合がよかったのにのう」

なぜって言われてもねえ。

「いくつか理由はあるけど一番の理由は正体を隠すため。普通に生活する分には正体がばれることはないからな。今回は手違いでばれてしまったが…」

魔法使いと関わりたくなかったのが本音だが。

「それで二人のことじゃが」

「危険はないぞ。咲夜は人間だし、ルーミアもよほど腹を空かせない限り安全だ。俺が面倒みるしな」

「なら心配はないかの」

「それより紫がいつていた仕事って何なんだ？食費や学費なんか全部俺が持つことになってな。俺の給料じゃ養えそうにない」

主に食費が。

「うむ。君たちには夜の警備員をやってもらいたい」

「警備員？」

「うむ。君が来てくれたおかげで妖怪の襲撃は減ったがそれでもまだ侵入者が多くてのう」

「別にかまわないが、後ろからいきなりグサリなんていやだぞ」

俺やルーミアはともかく咲夜は人間なんだから。

「そのことについてはしばらくは君の所の生徒と一緒に回ってもらおうかと思う。しばらく仕事をしていれば先生たちも危険がないとわかってくれるじやろう」

楽観的だな。

「で、それはいつから始めるんだ？」

「今日の夜に一度顔合わせと模擬戦を行っつもりじゃ」

今日の夜か。準備もできたしついでに…。

「模擬戦の後マクダウエル呪いを解くがいいか？」

「かまわんよ。もともと三年で解けるはずだったしの。その代わり
と言ってはなんだが」

「なんだ？」

「ネギ君を鍛えてくれんかの？」

第八話　　咲夜の世界

夜。世界樹前の広場に俺、ルーミア、咲夜の三人で向かう。

「それで学校はどうだった？」

両隣りを歩いている二人に聞く。

「とても楽しかったです。今度、五月さんに料理を教えてもらうことになりました」

「そうか。いい機会だからいろいろ学べ。五月の料理の腕は麻帆良一だからな。ルーミアは？」

「超に肉まんもらったのだー」

「なら今度超がやってる店に行くか」

「わはー」

あの化け物クラスに馴染めるか心配だったがよくよく考えてみたら幻想郷の奴らに比べれば全然大したことないな。

「よく来たな三人とも」

広場に着くと以前戦った時よりも多くの魔法使いがいた。一部の魔

法使いから明らかな敵意を向けてくる。まあ、無視していいだろ。

「まあ、ほとんどの者は知っているだろうが紹介しよう。此度から夜の警備を共にすることになった、時取纏静くん。ルーミアくん。十六夜咲夜くんじゃ。今夜は彼らの实力を見るために模擬戦を行う」

模擬戦かとりあえず実力順で行く方がいいだろ。

「じゃあ、こっちは咲夜から行こうか」

「わかりました」

咲夜がナイフを出しながら広場の真ん中に立つ。さて向こうは誰が来るのかな？

「私が行こう。我が友の従者の实力を見ておきたい」

エヴァが咲夜の向かい側に立つ。封印状態でどう戦うか見ものだな。

「両者とも準備はいいかの？……では、始めっ」

先に動いたのは咲夜だった。後ろに飛びながらナイフを投げ距離を取る。それをエヴァは指を向けるだけで防ぐ。あれは糸か？

「「咲夜の世界」」

「「咲夜の世界」」

咲夜以外の全てが止まった世界。文字通り咲夜の世界だろう。その中で咲夜がエヴァに近づいて行く。

「なるほど糸を操ってナイフを防いだんですか」

ナイフを回収しながら呟く。

「さてどうしましょうか？」

封印されているエヴァさんは普通の少女の体力ぐらいしかないし再生もできない。時取さんがいるから大事には至らないだろうがかといってお嬢様のご友人を傷つけるわけにはいかない。だからってお嬢様のメイドとして負けるわけにはいかない。

「とりあえず、動きを止めましょうか」

ナイフが服を地面に縫いつけるように投げる。もといた場所に戻る
と能力を解除し言葉を呟く。

「そして時は動き出す」

「そして時は動き出す」

咲夜が呟いたかと思うと目の前に無数のナイフがあった。なるほどこれが時を操るといふことか。しかもご丁寧に私には当たらんようにしているが。

「舐めるなっ！」

おそらく私の服を縫い付けようとしているであろう攻撃を避けるため。糸を操り自分を後ろに引っ張り避ける。それと同時に糸を咲夜に向けて飛ばす。

「くっ！？」

糸が咲夜の足をとらえそのまま釣り上げる。

「十六夜咲夜。私を傷つけてもかまわんお前の本気を見せてみる」

あいつらの従者がこの程度のはずないだろう。

糸を切り時間を止める。確かに傷つけずに勝つなんて虫がいい話かなら！

「くっ！？」

エヴァさんに近づき拳を振るう。拳がほぼ零距离の状態の時に時間を戻す。吹っ飛んでいくエヴァさんをおい追撃を狙う。

「これでっ！？」

エヴァさんがカウンターを狙い腕を取ろうとした瞬間時を止めナイフを投げる。時を戻してエヴァさんがのけぞって避けたところを足払いをしのど元にナイフを突き付ける。

「封印されているとはいえ私を傷一つ付けずに倒すとはな。あいつらはいいい従者を見つけたようだな」

「最高の褒め言葉です」

「そこまでじゃ」

たとえお嬢様のご友人でも負けるわけにはいかないお嬢様と共にいるには完璧でなければいけないのだから。

第九話　闇の少女

「よくやったな咲夜」

戻って来た咲夜に労いの言葉をかける。

「ありがとうございます」

頭を下げた後、俺の左隣に黙って立つ。あゝほんとに咲夜みたいな従者欲しいわ。

「わたしにはお嬢様がいますので」

どうやら顔に出ていたようだ。

「次はルーミアの番なのだ」

俺がそう思っているうちにルーミアが両手をあげて彼女曰く聖者は十字架に磔られましたのポーズをとり広場の真ん中にふよふよとんでいく。魔理沙はあのポーズを見て人類は十進法を採用しましたっで見えるとかいっていたけれど俺にはこれからダブルリアットしますっ見えるな。……どーでもいいか。

「誰が相手なのだー？」

「私が行きます」

そう言って出てきたのは氷のように透き通った少女。この感じは…。

「女子高等部一年。雪風氷花です」

「そーなのかー。私はルーミアなのだー」

挨拶を終えると雪風は距離をとる。

「二人とも準備はいいようじゃの。始め！」

先手を取ったのは雪風だった。片手をルーミアに向けて

「穿孔氷柱！」

鋭い氷柱を無数に放った。

「穿孔氷柱！」

その攻撃を見てルーミアの顔に自然と綻ぶ。ああ、これはまるで弾幕のようだ。相手が弾幕で来るならこちらがやることは一つ。

「夜闇「太陽の母」」

闇の美しさで相手を魅了し打ち倒すのみ。そう思った彼女の背後には夜をも覆う闇が現れその闇から大玉の光弾がいくつも飛んでいく。相手の雪風は地を駆け彼女の攻撃を避けながら氷柱で攻撃を仕掛けてくる。

「氷翼」

私のスペルが終わった直後雪風が氷の翼で飛ぶ。彼女が羽ばたくたび氷の粒が弾幕と化して私に襲いかかる。それ避けながら飛びカードを出し宣言する。

「冥符「遙か地下からの暗黒」」

地面が一瞬にして闇に染まりそこから次々と漆黒の球が撃ち上がる。雪風は必死に上へ上へと逃げるが翼に被弾してしまい落ちる。氷の翼を展開しようとするがうまくいかず雪風は瞳を閉じた。

「闇よ」

『闇よ』

そんな言葉が聞こえた言葉が聞こえたかと思うと何かに乗る感覚があった。恐る恐る目を開けるとゆっくりと自分が下りていた。自分を支えているものを見ると黒い何かだった。触ってみると意外と柔らかく心地よい冷たさだった。ぷにぷにぷに。

「どう、私の闇は？」

「ひゃいつ!？」

後ろを見るとルーミアさんがにやにやと見ていた。恥ずかしい。

「あつ。はい。気持ちいいです…」

「そーなのかー」

ルーミアさんの顔がにやにやからニコニコに変わった。何、この可愛い子。お持ち帰りしたい。

「ねえ、また今度弾幕ごっこしてくれない？」

「弾幕ごっこ？」

「幻想郷の決闘方法だよ。さっきみたいにお互い弾幕を打ち合って相手を落としたり相手の技を全部攻略すれば勝ち。人間も妖怪も関係なく対等に戦える遊び」

ルーミアさんのいう弾幕ごっこは私の戦闘方法を鍛えるにはぴったりだ。それに何より彼女との戦いは楽しかった。

「いいですよ。また、一緒に弾幕ごっこしましょう」

「わはー」

私が了承すると笑顔で私の周りを飛び始めた。あゝ、ほんと可愛い。

ルーミア達が下りてくると何か笑顔で話した後こっちに戻ってきた。

「どうした？うれしそうな顔して」

俺の隣で今にも鼻歌を歌いだしそうなほど上機嫌なルーミアに訊ねる。

「今度、氷花とまた弾幕ごっこをすることになったのだー」

なるほど、さっきの戦闘は確かに弾幕ごっこだった。あれなら少しコツを教えるだけで彼女はもっと強くなるだろう。なら…。

「彼女にスペルカードでもあげるか」

「本当なのかー」

「ああ、彼女には才能がありそうだからな」

その前に…。

「俺の相手は誰だろうな」

楽しめる相手ならいいんだが。

第九話　闇の少女（後書き）

スペルカード説明

夜闇「太陽の母」

ギリシャ神話の夜の女神ニクスが昼の女神ヘメラを生んだ話をイメージして作り上げたスペル。自分の後ろに闇を展開させそこから太陽をイメージした大玉の光弾をいくつも放つ。

冥符「遙か地下からの暗黒」

同じくギリシャ神話の地下の暗黒の神エレボスをイメージして作ったスペル。地面を闇で埋め、漆黒の球をいくつも上空へ放つ。遙か地下からの言葉通りかなり深く飛べない相手は闇に沈む。運が良ければ球に押し上げられて外に出られるが基本的にルーミアが出さない限り出れない。

第十話　受け継ぎ

「さてと、俺の番か」

ゆつくりと広場の真ん中に向かう。タカミチあたりが相手かな。

「僕が行きます」

タカミチがポケットに手を入れたまま出てくる。行儀悪いな。

「では、始め！」

「フッ！」

「いきなりかよ！」

試合開始と共に放たれた拳圧を走りながら避ける。ていうか、わざわざポケットに手を入れる必要があるのか？普通に殴った方が速そうだが。

「攻撃してこないのかい？」

「あまり手の内は見せたくないんだよ。いまだに悪意のある目で見てる人もいるしね。まったく、俺が何したっていうんだ」

「それは」

苦笑いしているタカミチの周りを走りながらポケットを探り一枚のカードを出す。

「長引くのもなんだしさつさと終わらせるよ」

「そう簡単にはいかないよ」

「いくさ。俺には心強い仲間がたくさんいるからな」

走るのをやめてスペルカードを発動させる。

「想起「果てなる地に住まう人が恐れし強き者達」」

自らが受け継いだ彼らの想い。今この時、我が体は彼らと同じ鬼と化す。この手は全てを打ち払い。この足はただ前へと進み。この想いは決して曲がらない。

「咸卦法！豪殺居合い拳！」

「ぬるい」

咸卦法で強化された居合い拳をただ殴り返す。それだけで風が荒れ地面が揺れる。そのままタカミチの前まで攻撃を捌きながらゆつくりと歩いて行く。

「まだやるか？」

「参った。僕の負けだよ」

「そこまでじゃ。これで彼らの力量はよくわかったじゃろう。それではこれよりエヴァンジェリンの呪いを解く。何か文句のある者はおるか？」

学園長が魔法先生、魔法生徒一人一人を見て確認する。俺を殺してまで止めようとしたのに誰も何も言わないのかよ。まあ、学園長がタカミチがなんか言っただか？

「誰もいないようじゃの。では纏静くん頼むぞ」

「了解。マクダウエルこっちこーい」

咲夜の隣にいたマクダウエルを呼ぶ。

「本当に解けるんだろうな？」

「解くと言っよりは移し替えるかな？」

マクダウエルの頭に手をのせながらそう言っ。

「どういうことだ？」

「こっいうこと。マクダウエル、お前の呪い俺が受け継ごう」

「なっ!？」

そう俺がいうとマクダウエルを縛っていた呪いが俺を縛る。

「バカかつお前!そんなことしたらお前が呪いに…」

「文句は最後まで見てから言え」

叫ぶマクダウエルを軽くあしらい。スキマから自分を模した人形を

取り出す。自身の呪いを人形に受け継がせる。俺を縛っていたものが今度は人形を縛る。

「お前の能力は受け継ぐだけじゃなかったのか？」

「応用が利くって言ったろ？受け継ぐってことは繋げていくってことだ。過去から未来に人から受け継いで人に受け継がせる。これが俺の能力の本質だ」

「チートめ」

「そのチートのおかげでお前の呪いは解けたんだ。感謝しろよ？」

軽く頭を撫で家に向かって歩き出す。マクダウェルの呪いが解けたのを確かめると解散させた。

「時取纏静か…。でたらめな奴だ。今年は退屈しないで済みそうだ

な
」

第十話　受け継ぎ（後書き）

スperlカード説明

想起「果てなる地に住まう人が恐れし強き者達」

ドーピングタイプのスperl。今まで受け継いできた鬼達の力を開放する。驚異的な身体能力を得る代わりに正々堂々な行動しか取れない、異様に酒が飲みたくなるなど制限が付けられる。

第十一話　スベルカード

日曜日、朝、時取家。

「おはようございます。時取さん」

「おはよう。咲夜」

咲夜が継いでくれた緑茶を飲みながら座椅子に座り部屋を見渡す。

「でねっ！そのお店の料理がすっごく美味しいの！」

ルーミアを抱きしめながら、畳の上をごろごろ転がる雪風氷花。

「そーなのかー」

料理の話に嬉しそうな顔をしながらいつもの言葉をいうルーミア。

「なんだこの家は！なんにもないではないか！」

我が物顔で座りながらちゃぶ台の上のせんべいをバリバリ食うマクダウエル。

「咲夜さん。お醤油はどこに…」

咲夜と一緒に朝飯の準備をしている茶々丸。

「お邪魔しています。時取さん」

お皿を準備している桜咲。

「お邪魔してるよ。時取さん」

同じくお皿を準備している龍宮。

うん。いつも通りの騒がしい朝だな。

「「「「「「「「ご馳走様でした」「「「「「「」

さてと飯も食い終わったことだしマクダウェルを外に放り投げて、

「じゃあ、スペルカードの説明をするか」

「「「よろしくお願いします」「「」

「ちよつと待てゐ！」

雪風たちにスペルカードの説明をしようとしたらマクダウェルが飛び込んできた。

「なんだ穀潰し。邪魔するな」

「うるさいっ！穀潰しとはなんだ！私にも教えろ！」

しょうがない。マクダウェルを雪風の隣に座らせスペルカードの説明を始める。

「スペルカードは自身の力を札に封じ込めるもの。作る利点としては技名を唱えるだけで発動できる。込める力の量によって威力を変えられる。何度でも使える。主にこの三つだな」

雪風はメモ帳にメモしながら聞き、桜咲と龍宮は授業のようにきちんと聞き、マクダウエルはせんべいを喰いながら聞いている。肥えてしまえ。

「はい！質問です」

「はい、雪風君」

元気よく手をあげる雪風を指す。

「技名を唱えるだけで発動できるということですが、それは闇討ちなどに使えないということですか？」

「いい質問だ。雪風君にはルーミアを愛でる権利をあげよう」

「やったー。ルーミアちゃん」

俺の隣にいたルーミアを膝の上に載せ思っ存分愛でている。

「質問の答えだがやろうと思えばできる。その代わり普通以上の力を使い威力も著しく低下する。スペルカードは弾幕ごっこのために作ったものだからな。不意打ちや闇討ちなどはやらないことを前提に置いてある。カードを見せながら「喰らえっ！」とか「行くぞっ！」とかとにかく相手に何かを使うことを伝えれば技名じゃなくてもいいけどな」

咲夜にお茶のお代わりを頼み話を続ける。

「次にスペルカードは主に五つのタイプに分かれる。

一つ目は弾幕タイプ。これは一番基本的なタイプだ。大量の弾を放ち弾幕を形成するタイプだ。メリットとしては攻撃が当たりやすい。相手が回避等に専念するために相手の攻撃を止められる。デメリットとしては一発一発のダメージが低い。

二つ目はパワータイプ。極太レーザーや大玉の球を放つタイプだ。メリットは一発一発のダメージが大きい。デメリットは隙が大きくなること。

三つ目はストレスタイプ。レーザーや弾で相手を囲ったりして行動を制限するタイプだ。メリットは弾幕タイプ以上に攻撃を当てやすい。デメリットは複数相手では使えないこと。

四つ目は奴隷タイプ。式神などを操り多方向から攻撃するタイプだ。メリットは一時的に一对多の場面を作ることができる。デメリットは操ることに集中して自分に隙がでやすい。

五つ目はドーピングタイプ。一時的に自分の能力をあげるタイプだ。メリットは普段以上の力を使える。デメリットはそれなりに負担もかかる。

主にこの五つだ。これ等のタイプを組み合わせでスペルカードを作る」

ポケットからいくつかのスペルカードを出し机に並べる。

「スペルカードを作るにあたって大事なことが二つある。一つはイメージ。一つは名前だ」

「イメージと名前ですか？」

桜咲の言葉に頷き説明を続ける。

「イメージの方は解るだろう曖昧なイメージじゃスペルも弱くなってしまう。より確固なイメージがスペルを強くする。名前はスペルカードにとって最も大切なものだ。適当な名前をつけても駄目だ。名は体を現すの言葉の通りその名前に相応しい力がスペルにも表れる。まあ、とりあえず一枚ずつあげるから作ってみるといい。イメージしながら魔力やら霊力を込めればできるから」

白紙のスペルカードを一枚ずつ渡す。さてどんなスペルができるかな？

第十二話　幻想への入り口

「はあ〜」

放課後の教室。教師と二人きり。二人の間に甘い空気ではなく手元には課題。なんで私がこんなこと。

「手が止まってるぞー長谷川」

このクラスの副担任時取纏静。このクラスでまともな人に入るこの人に苦しめられるとは。

「家に忘れただけで課題追加は酷くないですか？」

「酷いって。ちゃんと言っただろ？忘れたらたとえやってあったとしても居残りさせるって。それに課題がやってあるなら半分はすぐ解けるだろ？」

「確かにそうですけど…」

課題も半分は終わっている。だけでももう半分となれば話は別だ。あゝこんなことなら無理してホームページ更新するんじゃないかった。今日の更新は無理かな？

「半分は終わってるみたいだな。課題はしっかりやっみたいだな。それじゃあもう一枚の方はやらなくていいぞ」

「えっ？いいんですか？」

やったこれなら十分更新する時間はある。片づけを始め教室を出ようとする私に奴は、

「いやいや。誰も帰っていいなんて言っていないぞ？」

なんて言いやがった。

「もう一枚の課題はやらなくていいんですよ？」

「おう」

「帰っちゃいけないんですか？」

「おう。お前が帰るところをクラスの誰かが見つけてみる。こんなに早く終わったら俺の居残りが大したことないって忘れてくる奴が増えるだろ」

確かにそうかもしれないが、

「じゃあ私は何をすればいいんですか？」

「話し相手になってくれないか？」

そう言いながら缶コーヒーを渡してきた。まあ、話すだけならいいか。

と思っていた時期が私にもありました。

「人の家に勝手に侵入する奴。やたらと勝負を仕掛けてくる奴。真実と嘘を1：9で記事にする奴。所かまわず落とし穴で落とそうとしてくる奴。人の者を勝手に盗って行く奴。どう思う？長谷川」

延々と愚痴を聞かされてうんざりなんだが……………ものすごく共感できます。

「先生も苦労してるんですね」

「ああ。悪い奴らではないんだ。いざという時には頼りになるしな。と、俺ばかり話してばっかだな長谷川は何か言いたい事ないのか？」

この人ならこの街の異常を分かってくれるかもしれない。

「先生はインターネットとかやります？」

でもやっぱり無理だ。この人にまで嘔吐きと言われたくない。

「はあ」

あの後ネットの話を少しして居残りは終わった。それにしても、

「家に家電が一つもないってどういうことだよ」

確か十六夜も一緒に住んでるって言ってたな今度聞いてみるか。それにしてもすっかり遅くなっちまったな。冷蔵庫の中空っぽなの忘れてたぜ。

「…困りました。…麻帆良に来たまではよかったのですが肝心の人が見つかりません。…どうしましょう」

地図の前で着物を着た女子が困っている。はあ。見ちまったもんはしょうがないか。

「おい、あんた。誰を探してるんだ？」

「…時取纏静という人を探しているんですがあなたは知っていますか？」

先生。あんたの周りに女子が多い気がするのには気のせいかな？

「ああ、知ってるよ。□で説明し辛い場所だから案内するよ」

「…ありがとうございます。…私は鬼灯桔梗です」

「わたしは長谷川千雨だ」

送るついでだ。先生の家に家電がないか見せてもらおう。本当だったら今日書きこむ話のネタにでもさせてもらおう。そう思いながら森の中の道を歩いていると、

「人の子が悪いが死んでくれ」

ああ、どうやら今日の更新は無理みたいだ。

第十三話　強き鬼と弱き人

「人の子が悪いが死んでくれ」

そう言いながら私の身長ほどもある金棒を振り下ろす化物。ああ、私はここで訳の分からないモノに殺されるのか。そう思い目を閉じた。

ドガンッ！！

………？　なんだ案外痛くないものなんだな。死ぬ前つてのはこんなものなのか？　そう思い目を開けると、

「……逃げてください。……長谷川さん」

金棒を受け止める鬼灯の姿が。

「なんだ。同胞か？　なぜ邪魔をする？」

同胞？　何を言ってるんだ？　この化物は？

「……私は人と共に生きると決めた。……長谷川さんを殺させるわけにはいかない」

鬼灯も化物？

「何を馬鹿なことを。人と鬼が共に生きれるわけなかるう。強き我らを恐れ、欺き、打ち払ってきた奴らと。見てみる。お前が守ろうとしている人の子も人と違う我らを恐れている！」

ドガッ！！！！

鬼灯が吹き飛ばされて木に打ち付けられた。

「……それでも私は人と共に生きたい」

「そうか。なら楽に逝かせてやる」

鬼が金棒を振り上げる。そうだ、早く逃げないと殺される。

「……人の子よ。なぜ我の邪魔をする」

「……長谷川さん」

今すぐ逃げて部屋に閉じこもりたい位怖いのに、今すぐ逃げないと殺されるのに、どうしてこの体は鬼灯を庇っているんだ？

「人の子よ。そこをどけ」

「い、いやだ」

「なぜ、邪魔をする？お前が庇っているのは我と同じ鬼だぞ？お前たち人が恐れている鬼だぞ」

「わ、わかってるさ。鬼灯がひ、人じゃないことくらい。どかないとわた、私が殺されることくらい」

そうだわかってる。

「ならば、なぜお前は邪魔をする？」

「わた、しは、強くない。鬼灯がし、死んで私がい、生きても。ききつと一生、こ、後悔する。わ、私はそんなふうに、い、生きていけるほど、強くないんだ。私の心は」

誰かを犠牲にのうのうと生きていけるほど強くないんだ。

「…」

「…」

涙で滲んで目の前の鬼がよく見えない。がちがちと歯がなって周りの音もよく聞こえない。

「…どうして人は我が見限ろうとするたび私の心を揺り動かすのか」

「…」

「なぜだ？幻想郷の長よ」

「先生？」

「決まってるだろう。人も鬼もいろいろな奴らがいるんだ。人だ鬼だといつまでもひとくくりにしてるから互いに理解しづらくなる。機会があれば幻想郷に來い。幻想郷じゃ種族の違いなど些細な問題だ」

「そうだな。考えておこう」

そう言うとき鬼が消えた。

「よく頑張ったな長谷川」

先生の手が私を撫でてくれて力が抜けて誰かに支えられた。

「…ありがとう。長谷川さん」

その言葉を聞き私の意識は落ちた。

第十四話　幻想への一歩

「んっ」

目を開けるといつも見ている寮の天井ではない和を感じさせる木の板でできた天井。これはあれか？あの台詞を言うべきなのか？そうだよな。逃げちゃダメだよな。

「知らないっ」起きましたか。長谷川さん「……………」

少し顔を赤くしながら横を見るとメイドがいた。つーか、十六夜。今までいなかったよな？

「ついて来て下さい。皆さんお待ちです」

「起きたか、長谷川」

咲夜が消えたかと思ったら長谷川を連れてきた。前々から思ってたが、時間を止めている間咲夜は年をとるのか？

「ああ、それよりなんでエヴァンジェリンと絡繰がいるんだ？」

「長谷川の知りたい事を知ってるからだよ。知りたいだろ？自分と

周りの認識の違いを」

では話そうか。

関係者説明中……

「妖怪に吸血鬼にロボットしまいは魔法使い。いつの間にもうちのクラスは人外魔郷になったんだ？ああ、私の世界に非常識が満ちる」

話し終わると長谷川は頭を抱えブツブツ言いだした。

「この麻帆良では常識に囚われてはいけないのです」

茶々丸それは青い巫女の台詞だ。

「で、どうする？長谷川」

「どうするって何をだよ？」

「今、長谷川には二つの選択肢がある。一つは今知ったことを全て忘れて普通の世界に戻る。もう一つはこのままこっちの世界にもかわる。前者は普通の生活を送れる代わりに今回の用に巻き込まれ

る可能性がある。後者は危険な世界に踏み込む代わりに自分を守る術が得られる。さあ、どうする?」

そう言うと考え始める。今のうちにこっちの問題もどうにかしないとな。

「鬼灯」

「…はい。…なんでしょう」

幻想郷に住みたいと言っていた鬼の女子。だけど今は幻想郷には入れない。

「結界の調整が済むまでここに住んでもらうけどかまわないか?」

「…はい。…かまいません」

住人が増えるのか。今のところ食費のせいでぎりぎりの生活だし。彼女にも働いてもらうか。

「何か特技はあるか?」

「…特技。…模写とか荷物運びとかが得意です。…私の能力はうつす程度の能力です」

ん? 模写と荷物運び?

「写すと移すどっちだ?」

「…両方です。…わかりやすく言うと移し映し写す程度の能力です」

なるほどかなり使えそうな能力だな。いろいろと応用できそうだな。

「先生」

どうやら決まったようだな。

「先生」

今まで私を苦しめてきたまわりとの認識の違い。その原因は魔法使いが張った認識阻害。今更とやかく言うつもりはないがもう少しましなものにして欲しかった。そうすれば嘔吐きなんて言われなかっただろう。だけど今はそんなことどうでもいい。私の前には二つの扉がある。現実と幻想の扉。どちらの扉を選んでもきつとこの先生は守ってくれるだろう。私が麻帆良を出て普通の生活をするまで陰ながらに、私が自分を守る力を得るまで私の前に立って。前の私なら迷わず現実を選んだだろう。だけど私は知った。初めて会った私を命懸けで守ってくれる鬼や無数の生徒の中の一人にここまで親身になってくれる妖怪。なんにもしてくれなかった魔法使いは信じられないが、こいつらは信じられる。それに、ただ守られるだけってのはご免だ。

「わたしに戦う力を教えてくれ」

第十五話　魔法使い

次の日の放課後。俺と咲夜、ルーミア、長谷川、鬼灯、桜咲、龍宮、雪風はマクダウエルの家に向かっている。

「なあ、なんでエヴァンジェリンの家なんだ？先生の家じゃダメなのか？」

「マクダウエルの家の方が何かと都合がいいんだよ」

「そーなのかー」

「はあー。やっぱルーミアちゃんは可愛いなあー」

「まったくだ。刹那もこれくらい素直になればいいのだが」

「な、何を馬鹿なことを！」

「みなさんもうすぐ着きますよ」

「…あそこにいるのは絡繰さんですね」

咲夜がそう言うのと丁度マクダウエルの家が見えてきた。扉の前には絡繰が立っている。

「みなさんようこそいらっしやいました。どうぞマスターがお待ちです」

ガチャッ。

「ケケケケッ！」

ボタン。

ゴン。ドチャ。

「入るぞ。マクダウエル」

足元に転がってる人形の頭を掴んで持ち上げながらマクダウエルの家に入る。

「よく来たな。纏sへぶっ！？」

にやにや笑っていたマクダウエルの顔に人形を投げつける。少しすつきりした。

「何をする！？」

「従者の管理くらいしつかりしろ」

「ケケケ、イイジャネエカ。ヤリアオウゼ」

マクダウエルの頭の上でケタケタ笑ってる人形はチャチャゼロ。マクダウエルの最初の従者で封印が解けたことにより動けるようになったらしい。

「お前の相手は俺じゃねえよ。とりあえず別荘に行くぞ」

「もう何でもありだな。魔法って」

今私達はエヴァンジェリンの家の地下室にあつたボトルシップ？のようなものの中に入っている。なんでもここでの一日は外での一時間らしい。

「じゃあ本日のメニューを発表する。桜咲、鬼灯の二人はチャチャゼロと接近戦の特訓。ルーミア、雪風、龍宮の三人は弾幕ごっこで遠距離戦の特訓。長谷川は俺と魔法についての勉強。咲夜は俺のサポート。絡繰とマクダウエルは全体のサポート。それじゃあ始めっ！」

桜咲、鬼灯、チャチャゼロは下の砂浜へ。ルーミア、雪風、龍宮は建物の前の広場へ。私と先生と十六夜、絡繰とマクダウエルは教室のような部屋の中へ。それぞれ向かう。

「では、授業を始める。今回のテーマは幻想郷の魔法とこっちの魔法の違いだ」

「魔法に違いってあるのか？」

「あるというより全く違うと言った方がいいか。魔法使いの定義から違っ」

定義って魔法を使えるから魔法使いじゃないのか？

「こっちの魔法使いの定義は魔法が使えること。幻想郷の魔法使い

の定義は魔法が体の原動力となっていること」

「魔法が使えるってのは解るが原動力ってのはなんだ？」

「幻想郷で魔法使いになるにはある魔法の習得が必須だ。その魔法は捨食の魔法。食事を取らなくても魔力で補えるようになる。この魔法を習得した時点で魔法使いという種族になる」

つまり幻想郷の魔法使いってのは自分の体のつくりを変えてるのか。

「幻想郷の魔法を使うものはこっちの世界にほとんどいない。なぜだかわかるか？それはめんどくさいからだ。こっちの世界の魔法は決められた術式に魔力を注ぎ発動させる。いうなれば出来上がった機械に電気を流して動かすようなもの。対して幻想郷の魔法は一からすべて組み上げる。望む結果が出ないことや魔法自体発動しないことがある。しかしそこには無限の可能性がある。ただの魔法使いがたどり着けないような場所に至ることができる」

普遍化された魔法とそうでない魔法。

「こっちの魔法使いはいうなれば軍人。自らの正義を信じ、魔法という武力を使い守っていると思ひ込んでる者たちだ。対して幻想郷の魔法使いは研究者。自分の夢を追い求めただひたすらに魔法というものを追い求めていく」

長くなりそうだからパソコンにまとめとくか。そう思いパソコンを起動させると十六夜が驚いたような顔をした。

「どうしたんだ？そんな顔をして」

「長谷川さんは式神を使えるのですか？」

「「はあ？」」

エヴァンジェリンも私と同じように呆けて声を出した。先生を見ると少し考えやがて納得したという顔をした。

「幻想郷で言う式神の概念は「パターンを創ることで心を道具に変えるもの」だ。主が決めた方程式通り動くことにより自分の力以上の能力を使うことができる。パソコンも似たようなものだろ？計算式を使い、命令通り使役できる」

似たようなものなのか？まあ、エヴァンジェリンもなるほどか言ってるしそんなものか。

「十六夜、気になるなら後で教えてやるよ。さあ、先生授業を続けてくれ」

「そうだな、じゃあ次は…」

先生が言う言葉をカタカタとキーボードをたたいてパソコンに打ち込んでいく。それにしても式神か。充分に発達した科学技術は、魔法と見分けが付かない。十六夜は今の私を使い魔を操る魔法使いにでも見えてるのかね。

第十六話　おてんば氷柱娘

「基本的なことはこれで終わりだな」

そう言つと長谷川が糸の切れた人形のように崩れ落ちる。

「やっと終わったこれで休める……」

俺はそんなに優しくないぞ。スキマから魔道書の写しをいくつも出す。

「これとこれとこれ。それにこれも後、後ろに積んである奴も解読してもらつ」

「疲れてるせいかもしれないから一応聞くぞ？本棚一つに収まりきらないほどの魔道書が積まれてるように見えるんだが」

うん、長谷川の眼は正常だ。

「ちなみにこれ全部読むまでこの部屋から出さないからな」

「ああー！！もういいよ！やってやるよ！！私を甘く見るなよ！！！」

「よくいった。そんな君にはこれをあげよう」

机の上に錠剤が入った瓶を二つ並べる。

「右が捨虫捨食薬。一時的に魔法使いの体になれる薬だ。肉体の成

長を止め、食事は薬に内包された魔力で補う。一粒の有効期間は一年だ。左が胡蝶夢丸。楽しい夢が見られる薬だ寝る間に飲むといい」

「ちょっと待て。薬の内容から察して私は最低でも一年ほどここから出られないように思うんだが…」

「これ以外にも魔道書はあるからな。大丈夫だ。咲夜と俺でこの部屋の時間を限りなく遅くしてある。時間を気にせず存分に読め！」

「……………はあ。もう何言っても無駄だな。わかったよ。おとなしく呼んでるから他の連中のところに行ってくれ」

そう言くと薬を飲み魔道書を読み始める。

「じゃあ、マクダウエル、絡繰、後は頼む」

部屋に残っている二人に声をかけ部屋から出ていく。さて、ルーミアの方に行ってみるか。

「嫉妬「刺し貫く私の想い」」

「夜符「ナイトバード」」

空で巨大な氷柱と光弾が交差する。パワータイプのスペルカードか。

「なかなかいい出来だな」

「勉強はもう終わったのかい？」

銃を磨きながら龍宮が聞いてきた。

「基本的なことはな。それにしても「刺し貫く私の想い」か。つらら女にぴったりだな」

「つらら女？」

龍宮が首を傾げる。

「聞いてないのか？彼女はつらら女と人間のハーフだよ。つらら女は雪女みたいなもんだ。つらら女の伝承の結末は大きく分けて二つ。一つは結婚した男に風呂に入るように言われそのまま風呂で溶けてしまう。もう一つは春になってつらら女が消えた後、結婚した男は逃げられたと思い悲しみ、その悲しみを埋めるために新たな妻を娶る。冬になって戻って来たつらら女は怒りのあまり自信を氷柱に変えて男を刺し殺す」

「だから「刺し貫く私の想い」か。私も早く作らないとなあ」

そう言いながら白紙のスペルカードを眺める龍宮。

「先生のスペルを参考までに見せてもらえないかい？」

俺のスペルか。

「知り合いのスペルをアレンジしたのだが…」

カードを出し宣言する。

「浮気「移り気なマスタースパーク」」

背後にランダムに並んだ魔方陣からいくつものマスタースパークが放たれる。

「誰かのスペルをパクるのも一つの手だぜ」

「そーなのかー」

後ろを見るといつの間にか弾幕ごっこを終えた二人が立っていた。表情を見る限りルーミアが勝ったようだ。

「時取さん！私のスペルはどうでしたか？」

「よかったよ。けど少しスペルに頼り過ぎだな。通常弾幕と合わせて使わないと、力押しだけじゃ勝てないよ」

「わかりました！ルーミアちゃんもう一回行くよ」

「わはー」

そう言い二人はまた弾幕ごっこを始めた。

次は桜咲の方に行ってみるか。

ルーミアちゃんの光弾を紙一重で避けながら氷柱を放つ。ルーミアちゃんが手から放つ氷柱を避けている隙に氷翼から氷柱を上空に向けて放つ。これで下準備はできた。

「行くよルーミアちゃん！嫉妬「刺し貫く私の想い」」

巨大な氷柱を作り出し私の周りにいくつも待機させる。ルーミアちゃんは動かずにじっとわたしを見ている。だけどまだ撃たない。……まだ……まだ……まだ……今！

「いけっ！」

巨大な氷柱が飛んでいくと同時にさっき空に撃った氷柱が落ちてくる。捕らえた！

「下が開いてるよ？」

そう言うとルーミアちゃんが下に向かってものすごい勢いで飛んでいく。掛かりましたね。もう一枚スペルを作ったんですよ！

「氷荀「空を穿つ氷柱」」

地面から空に向かっていくつもの氷柱が伸びる。

「わわわっ!？」

ルーミアちゃんが止まれず氷荀に向かって突っ込み、上から落ちて来た氷柱に磔にされる。

「聖者は磔にされました?」

「まさかもう一枚スペルを作ってたとは。負けた」

「ふっふん。初勝利!!さあ、ルーミアちゃんもつとやるよ!!」

「手加減してたとは言え負けるなんて…。いいわ。幻想郷の弾幕を見せてあげる」

「ちよつまっ！？多い！多い！！多い！！！！いきなりスペルなんて
…え？スペルじゃないの？L u n a t i c？何それ！？あっ！ダメ
！当たる！当たる！！あッ」ピチューン。

第十六話「おてんば氷柱娘」(後書き)

スペルカード説明

嫉妬「刺し貫く私の想い」

つらら女の伝承を基に作ったスペル。巨大な氷柱をいくつも放つパワータップ。

浮気「移り気なマスタースパーク」

魔理沙のマスタースパークをアレンジしたもの。かなり魔力を消費するので魔理沙は使えない。

氷荀「空を穿つ氷柱」

洞窟に発生する逆さの氷柱(氷荀)をイメージして作ったスペル。いくつもの氷荀を地面から生やすが弾幕ごっこはほぼ空中戦なのであんまり使えない。

お知らせ

オリジナルのスペルを随時募集します。基本的にスペルカードを使うのは時取纏静、ルーミア、十六夜咲夜、雪風氷花、鬼灯桔梗、長谷川千雨、エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル、桜咲刹那、龍宮真名の九人です。これから増えるかもしれません。

時取纏静

妖怪の伝承を再現したスペル。または伝統など受け継ぐことに関するスペル。

ルーミア

闇に関するスペル。

十六夜咲夜

時に関するスペル。

雪風氷花

氷柱や氷に関するスペル。

鬼灯桔梗

鬼や能力に関するスペル。

長谷川千雨

未定。（どんな魔法を使って欲しいか書いてもらえとうれしいです。）

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル

氷と闇と吸血鬼に関するスペル。

桜咲刹那

剣と翼に関するスペル。

龍宮真名

狙撃や飛び道具に関するスペル。

というモノを考えています。

作者がいいと思ったものはどんどん出していきたいと思います。ではたくさんの意見お待ちしております。

第十七話　美しき鬼面仏心

「斬岩剣!!」

「ケケケケケケ！モット、モット！モット早くダ！！ソンススピーー
ドジャ俺ヲ捕エラレナイゼエー!!」

「くうっ!!」

生き生きしてるなチャチャゼロ。桜咲涙目だぞ。それより鬼灯は……
いたいた。

「調子はどうだ。鬼灯」

「……時取さん。……なかなかうまく手加減ができません」

「ちよつとその金棒、素振りしてみてくださいるか?」

「……はい、わかりました」

ぶおおん!

「ウオツ!!?」

「きゃっ!!?」

ひゅ~~~~~~~~……どぼん!!

「……これでも手加減してるんですけど」

手加減した素振りて人が空を飛ぶか…萃香たちより力あるんじゃないのか？まあいいか枷を一応作っておいてよかった。

「ほら、これを両手両足につける」

「…ミサंगा…ですか？」

「ああ、ミサंगा型の枷だ。普通なら一つで十分だが鬼灯は人一倍、いや鬼一倍力があるようだからな」

少し模様を見てから四肢につける鬼灯。

「力をコントロールできるようになったら千切れるようになってるからそれをつけて生活するといい」

「…ありがとうございます」

「いきなり吹き飛ばすってどういうことですか!？」

やっと戻って来たか。とりあえず。

「咲夜、着替えを」

「わかりました」

咲夜が桜咲と共に消えて少ししたら戻って来たが。

「なぜにメイド服？」

「茶々丸さんのお姉さんに借りました」

そう言えば確かにメイドロボがたくさんいたなあ。

「なんで私がこのような格好を…」

「とりあえず桜咲と鬼灯で模擬戦してみてくれ」

さて鬼の力なしでどこまで戦えるか。

「行きます！」

桜咲さんがまっすぐこちらに向かってくる。普通の鬼なら正面からぶつかるところですが私は普通の鬼ではないので。

「…ふっ！」

「なっ！？」

刀の軌道を外に移しつつ背後に回り背中を押す。空中で体制を整えてますが遅いです。金棒で地面を叩きその衝撃を桜咲さんの真下に

移し炸裂させる。

「くはっ!？」

うまくいったようですけど飛び散った砂でよく見えませんね。晴れるまで待ちますか。…と思ったら斬撃が飛んできました。半身になつて避けます。

「はあああ!!百烈桜華斬!!!」

「…百列桜華斬」

桜咲さんの技を写し取り技を相殺する。

「何!？」

「…王手です」

驚いてる隙に近ずき金棒を突き付ける。

「今のは神鳴流の技、どうして鬼灯さんが？」

「…写すには模倣するという意味もあるんですよ」

やはりいいですね人並みの力が必要以上に傷つけずに済みます。ですが、金棒は少し重いですね。代わりの武器を考えませんと。…その前に。

「ケケケケケケケケ」

チャチャゼロさんの相手をしないといけないようです。

第十八話　奇才の魔法使い見習い

パタン。

「やっと、終わった」

最後の魔道書の写しを読み終え机に突っ伏す。

「お疲れ様です。長谷川さん」

茶々丸が毛布を持ってきながらそう言う。

「ありがと。ちょっと寝るから片づけよろしく」

胡蝶夢丸を一口飲み横になる。おやすみ。

「久しぶりの外だな」

咲夜に入れてもらった紅茶を飲んだと長谷川が出てきた。俺達からするとまだ数時間しか経ってないけどな。

「お疲れどれくらいかった？」

「さあな。十年過ぎたあたりから数えてねえ」

「五十年。正確に言えば五十四年と三カ月と十三日です」

長谷川の言葉に絡繰が答える。その後ろからマクダウェルが魔道書を読みながら歩いて来ている。

「意外と速かったな。百年ぐらいはかかると思ってたのに。才能あるんじゃないか？」

「才能ね。どうせなら普通の生活で役に立つものが欲しかったよ」

そう言いながら咲夜が入れた紅茶を飲む長谷川。うん。薬のおかげで魔力量も増えてるみたいだな。

「それじゃ、次のステップに移るか」

そう言うとも明らかに嫌な顔をした。

「そんな顔をするなよ。片手間にできることだから」

紅茶を飲みながら手の上に光弾を作り出す。

「やってもらうことは魔力のコントロールだ」

手の上の光弾を適当に飛ばす。

「なんだそんなことか」

長谷川が手のひらから光弾を出し自分の周りを回らせている。うん、どうということ？……説明を求め絡繰とマクダウェルを見る。

「魔術書に書いてあった魔力のコントロールをマスターに聞きながら試していました」

「とりあえずコツを教えておいたらペン回し的な感覚で魔術書を読みながらやってたぞ」

「……………卒業したら幻想郷に呼ぼうかな。かなりの魔法使いになれそうな気がする。俺でも魔力をここまで操れるようになるのに十年かかったぞ。」

「…もう俺が教えることないんじゃないか？」

「そんなことはないだろ。そんなことより私は使役や召喚の魔法を使っただけだと思うんだがどう思う？」

「いいんじゃないか？そうになると使役する奴らが必要だな」

まずは妖精や妖獣あたりから始めるか。そうなるとどうやって探すが問題だなこっちは妖精も妖獣もあんまりいないし、いつそのこと一から作るか。

「マクダウエル。此処みたいな魔法球まだあるか？」

「うん？昔ためしに作ったものがあるが中は更地だぞ？」

「それでいいからくれ」

「それなりの対価は「今読んてる魔道書は誰のだ？」…わかったよ。茶々丸」

「はい、マスター」

しばらくすると茶々丸が魔法球を持ってきた。中に入って、それじや早速始めるか。

主人公栽培中…

うんとりあえずこれくらいでいいか。あとは時間を進めておいてその間に動物を捕まえに行くか。

主人公捕獲中…

結構集まったな。後は魔法球の中に放して準備完了。

「後はしばらく放って置けばいいだろう」

「何してたんだ？」

魔法球から出ると長谷川がパソコンをいじりながら聞いてくる。

「幻想郷で育った植物の種や苗を植えて少し育てた後適当に動物を

捕まえて放っておいた。しばらくすれば妖精も出てくるだろうし、力を持った動物は妖獣になるだろう」

「ふーん」

その後それぞれ修業をして一日たったので外に出る。雪風、龍宮、桜咲は寮に戻り長谷川はうちでもう少し幻想郷の魔法について勉強することになった。

家の前に着くと中から声がする。なんかすごい嫌な予感がある。家に入ると中では、

「むほほほほほ！」

下着（ルーミア、咲夜、鬼灯の物）を山ほど持ったオコジヨが走り回り、

「ちよつとっ！？待ちなさいエロガモ！！」

そのオコジヨを捕まえようと神楽坂が走り回り、

「カモ君こんなことしちゃダメだよ！！」

なぜか下着（ルーミアの物）を一枚握りしめながらオコジヨを追う

ネギ君。

「あのオコジヨは食べてもいいオコジヨ？」

「ああ。今日の晩御飯はオコジヨ鍋だな」

「腕によりをかけて作りましょう」

「少し私にも分けてくれ試したい術式が…」

第十九話　本能に忠実な淫獣

纏静たちが修業を始める一時間前。

『ネギ君を鍛えてくれんかの？』

『気が向いたらな』

まあ、ネギ君が直接言えば受けてくれるじやろ。

「しずなくん。放課後ここへ来るようにネギ君に伝えておいてくれるかの」

「わかりました。学園長」

一応エヴァにも頼んでおこうかのう。

「で、兄貴どこに行くんですかい？」

ネギの肩に乗っているオコジヨ、カモベール・アルベールが尋ねる。

「副担任の時取先生の家だよ。カモ君。学園長が言うにはとても強いらしいんだ。だから修業をつけてくれるよう頼みにね」

「時取先生がね〜。となると一緒に住んでるルーミアちゃんと咲夜さんも関係者っていうこと？」

明日菜がネギの隣を歩きながら自分の考えを呟く。

「あの美少女二人と住んでいるんですかい！？なんて羨ま〜けしからん野郎ですぜ！」

「本音が漏れてるわよ、エロオコジヨ」

「あ、ここですね」

目の前には純和風のお屋敷が立っている。ほとんどが西洋風の建物の麻帆良では珍しい家だ。

コンコン。

「時取先生。ネギです」

シーン…。

「おかしいな。僕より先に帰ってるはずなのに…あ、開いてる。お邪魔しますよ〜時取先生」

「ちよつとっ！？ネギ！」

明日菜の言葉をスルーしながら中に入るネギ。

「時取先生。いませんか？……いないみたいです」

ゴンッ！

「勝手に入っちゃだめでしょ！」

「す、すみません」

ネギに拳骨を落とす明日菜。

「さ、出直すわよ」

ネギの首根っこを掴んで玄関に向かうがあることにきずく明日菜。

「ネギ。…エロガモは？」

「あ…」

「むほーーーー！」

その時奥から聞こえる奇声。

「あのエロオコジョっ！！さっさと捕まえるわよ！」

「ハ、ハイ！」

声が聞こえる部屋に入るとパンツに埋もれたオコジョが一匹。

「見てください兄貴！パンツのほかにドロワーズもありますぜ！」

「このっ!!」

「へへっ!!甘いつすよ姐さん。そんなスピードじゃ俺っちを捕ま
えられねえぜ!」

逃げるオコジヨ、追いかけるアスナとネギ。

「待ちなさいっ!」

「ここで捕まるわけにはいかねえっ!喰らえっ!パンツ弾幕!!」

「ちよっと人のパンツでなにしてるのよ!」

「あわあわあわ」

「世界中のパンツは俺っちのものだ!」

無数に投げられた下着を華麗に避けて追いかける明日菜と顔に当た
った大人っぽい黒い下着を持って顔を赤くしているネギ。

「むほほほほほ!」、

「ちよっとっ!?待ちなさいエロガモ!!」

「カモ君こんなことしちゃダメだよ!!」

「あのオコジヨは食べてもいいオコジヨ？」

「ああ。今日の晩御飯はオコジヨ鍋だな」

「腕によりをかけて作りましょう」

「少し私にも分けてくれ試したい術式が……」

「……潰していいですか？」

逃げ回るオコジヨの前に立ちはだかる五人。

「何人いようと俺たちは止められないぜ！」

オコジヨが五人の隙間を走り抜けようとした時。

「咲夜」

「はい」

いつの間にか捕まったオコジヨ。

「あ、ありのまま起こった事を話すぜ！」俺たちは奴らの間を駆

け抜けたと思ったらメイドに捕まっていた』な、何を言っているのかわからねーと思うが俺っちも何をされたのかわからなかった…頭がどうにかなりそうだった…催眠術だとか超スピードだとかそんなチャチなもんじゃあ断じてねえもつと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ…」

「まずは皮を剥いで…」

ナイフを取り出して調理手順を確認しているメイドさん。

「そこのお兄さん何とかありませんか？」

「ムリダナ（・x・）」

その日麻帆良の森に甲高い悲鳴が響いた。

第二十話　ストレスとたらい回しと愚痴と

アニマルセラピーというものをご存じだろうか？アニマルは動物、セラピーは治療または療法という意味だ。つまり動物と触れ合うことで精神を安定させる療法。もっと簡単にいえば動物と触れ合うことで癒されストレスを和らげ、共に暮らすことで規則正しい生活を送れるということだ。なぜ俺がこんなことを言ってるのかというとストレスがやばいからだ。ただでさえ自称正義の魔法使いやスキマのせいで胃薬常備の状態の所に今回の事件だ。獣成分が来たと思ったら変態だとは…。あゝ幻想郷にいたころが懐かしい。あそこにも同じくらいストレスはあったが代わりに癒しがあった。藍や椋の尻尾。橙や鈴仙、てゐの耳。永遠亭にいるたくさんの兎。何が言いたいのかというと……………

モフモフしたい！！

あの尻尾を！あの耳を！あの体を！ふさふさの毛による最高の手触り。抱きしめたときに感じる体温の心地よさ。藍や橙がいたからスキマの無茶ぶりにも耐えれた。椋がいたからパパラッチのしつこい取材にも耐えれた。てゐのいたずらもてゐの耳があったから許せた。鈴仙と永遠亭の兎たちがいたから永琳の実験にも耐えれた。

なのに今回来たオコジョはなんだ！害悪以外の何物でもないじゃないか！

まあそんな話は置いといて、

「俺に修業をつけて欲しいと？」

「はい！」

「あんたも苦労してんのね」

ネギ君は元気良く返事をし、神楽坂は俺の話を聞いて同情してくれている。それにしても修行ねえ。

「めんどくさい」

「ええ！？」

「ですよ〜」

「明日菜さんまで！？」

神楽坂が同意してくれた。成績を少し上げ解いてやろう。

「おい、てめえ！……なんで兄貴に修業をつけてくれないんでしょ
うか？はい、すいません。自分ちよーしこきました」

「俺は魔法使いじゃないからな。魔法使いとして強くなりたいなら
ここへ行け。間違いなく超一流の魔法使いがいるから」

そう言いエヴァの家への地図を描く。ネギたちはそれを受け取ると
ものすごい勢いで飛び出していった。

「もうやだ。何してくれちゃってんのあのぬらりひょんは。ただで
さえ監視の目があるのにあいつが来たらもつとひどくなるじゃん。
そんなに強くしたいなら自分で育てればいいじゃん。どうせ学園長
室に引きこもってるだけだろ？オンラインゲームみたいに寝る間も

惜しんでコツコツ育てりゃいいじゃねーか。この麻帆良二トめ。それに魔法使い共もだ。こそそ見てんじゃねーよ。来るなら堂々と正面から来い。返り討ちにしてやんよ。バカみたいに正義に執着しやがって。お気楽でいいですね。あいにく俺はそんなに単純じゃないんですよ。ああ、妬ましい。妬ましい。ばるばるばるばるばるばるばるばるばるばる……」

「ネギ先生ってそんなに優秀なのか？」

「才能だけなら超一流だよ。英雄の息子だしな。魔力の扱いを見るにその才能も生かしきれてないようだがな。今なら長谷川でも勝てるぞ。弾幕で攪乱、罠を作成、誘導。その後は「先生ーーーーッあなたがッ、泣くまで、殴るのをやめないッ！」と言いながら殴るもよし「戦争を、しましろう」と無数の文房具を取り出すのもよし「私の戦闘力は530000です」片手で戦うのもよし。さあどれでいく？」

個人的には一番目をやってもらいたい。二番目も捨てがたいが。

「なんだ私に戦わせる気なのか？」

「しつこく弟子にしてくださいとか言ってきたらな」

めんどくさいし。

「ああ、そういえば勉強しに来たんだったな。さあ、何でも聞け」

「大したことじゃないんだけど、妖精や妖獣を従えることになった。従えるコツとか無いのか？魔法で縛るだけじゃうまく操れな

いだろ？」

「妖精の方は簡単だ。ちっちゃい子の興味のあることで興味を引けばいい。基本的に頭はよくないしな。妖獣の方は知能がいいやつは話し合いで力が強いやつは戦って上下関係を教えられるかな。妖精のことについてもっと知りたいなら咲夜に聞けばいい。確か妖精をメイドとして雇ってたから」

「なら明日聞くな料理の邪魔しちゃ悪いし、それじゃまた明日」

「ああ、また明日」

その頃エヴァ宅

「兄貴！こいつ元賞金首、闇の福音ですぜ！」

「ええ！？」

「ちょっとどついつことよ！？」

「うるさいぞ貴様ら！私の家に不法侵入しておいて何を騒いでる！

「！」

「マスター、私が招き入れたので不法侵入にはなりません」

幻想郷の景色／博麗神社

幻想郷の東の端にある博麗神社。外の世界との境界に立っており幻想郷で最も重要な建物。今回はそんな神社の一日を見てみよう。

『妖怪の賢者ずさんな管理に信用がた落ち』

ある春の日幻想郷に戦慄が走った。

なんと、この幻想郷を守っている二つの結界が一時的に消滅の危機に陥ったという情報が入ったのだ。

情報確認のために普段結界の管理をしている妖怪八雲藍に話を聞きに行くところになっていたのはそこに付している八雲藍だった。

医者の八意永琳さんの話によると過労らしい。九尾の狐である彼女が過労なんかで倒れるだろうか？そのことを八意さんに聞いてみると

「九尾の狐だからこそ過労で済んでいるのよ。普通の人間や低級の妖怪ならここまで来る前に天に召されるわよ」
だとか。

今回の事件の原因は妖怪の賢者八雲紫が結界の管理を怠ったことにある。いくら優秀な式神でも一つの世界を維持するに等しい仕事を一人に全部任せては限界が来るのは自明の理である。

これを機に八雲紫のことを調べてみた。

- ・一日平均十二時間睡眠（冬眠あり）
 - ・能力による不法侵入
 - ・特にこれといった仕事をしてない
- などなどなぜ彼女が重要な立場にいるのか疑問を覚える。

現在八雲紫は閻魔さまの監視のもと結界の修復に勤しんでいる。また修復するにあたって幻想郷は一時的に外と完全に隔離される。この影響で時取纏静、ルーミア、十六夜咲夜の三名が外の世界に残された。一刻も早く修復して欲しいものである。

少しばかり内容は古いが文々。新聞初真実100%の新聞を横に置きお茶を飲む腋巫女こと博麗霊夢。彼女は博麗神社に住む異変解決の専門家である博麗の巫女である。異変解決の専門家であるため普段は仕事がない。

「平和ね…」

「相変わらずのんびりしてるな。霊夢」

のんびりしているところに来たのは霧雨魔理沙。黒いとんがり帽に黒いドレス、白いエプロンといかにも魔法使いですという見た目の少女だ。

「また来たの？」

彼女は暇さえあればこの神社にやってくる。

「今日は聞きたい事があるんだぜ。パチュリーに聞いたんだが幻想郷が完全に隔離されたって本当か？」

そのこと？と霊夢はお茶と共に横に置いてあつた新聞を魔理沙に渡す。

もらうぜと魔理沙はお茶を飲みながら新聞を読む。新聞を読み進めることにその顔は曇ってくる。

「つまり、しばらく纏静と弹幕ごっこができないってわけか」

「ウチの参拝客が減るってことよ」

「すまないな。紫さまのせいで」

神社の中から出てきたのは九本の尻尾を揺らしながらお茶請けのお菓子を持ってきた八雲藍。

「おっ。ついにあいつの式神をやめたのか？」

「結界の調整が済むまで休暇としてここにしばらく厄介になることになったんだ」

「いつそのこと魔理沙の言うとおりに式神やめたら？うちなら大歓迎よ？纏静も従者が欲しいってばやいてたし」

「あれでも私の主人だ。そう簡単に鞍替えするつもりはないよ」

「ほんといい従者よね。なんで纏静にはできないのかしら?」

「全部一人でできるからだぜ。家事も仕事も完璧だろ?」

「できるからって全部やる必要はないでしょ」

彼女は本来神に使えるべき巫女なのだが自分はやろうとは思わない。

「平和ね…」

「平和だぜ…」

「平和だな…」

こうして博麗神社の日々は過ぎていく。

「あなたは少し怠慢すぎる。クドクドクドクドクドクドクドクドクドクドクドクドク…」

「纏静。藍。靈夢。誰か手伝つて。」

第二十一話　井の中の蛙

「行きます！ラス・テル・マ・スキル……」

目の前には呪文詠唱を始めるネギ君。

「さあ、お前の力を見せてみる！」

偉そうに命令してくるマクダウエル。

どうしてこうなった！？

数時間前のエヴァ

ぼーやの修行を始める前に実力を見ておくか。

ついでに纏静に相手をさせて奴の実力の一端でも見せてもらうか。

よし。茶々丸連れてこい。

数時間前の俺

よし。仕事も終わったしダラダラするか。

咲夜。お茶を入れてくれ。

茶々丸。どうしたんだ？ぐふっ！？

いつの間にか別荘。（いまこ）

「まあ、現実逃避はこれくらいにしてさっさと終わらせるか」

「魔法の射手！！連弾・光の9矢！！」

光ね。残念だけど俺には効かないな。手をかざし当たる寸前で屈折させる。（光を屈折させる程度有能力）

「なっ！？これならどうだ！！ラス・テル・マ・スキル・マギステル！！風の精霊17人縛鎖となりて敵を捕まえる魔法の射手・戒めの風矢！！」

今度は風か。風ならある程度操れるな。（風を操る程度有能力）自分の技に捕まりな。

「くっ！？どうやって僕の魔法を…？」

自分の魔法に捕まってるネギ君。

「教えるわけないだろ。ほらっ。待っててやるから早く抜け出せ」

一分後。

「こうなったら僕の全力を出します！！ラス・テル・マ・スキル・マギステル！！来れ雷精！！風の精！！雷を纏いて吹きすさべ南洋

の嵐！！雷の暴風！！」

うん。なかなかの技だが…。

「パワーが足りないな。魔砲「マスタースパーク」」

マスタースパークが雷の暴風を突き破りネギが海へと落ちる。

「2時間前に出直してきな」

ネギ視点

「魔法の射手！！連弾・光の9矢！！」

九つの光の矢が時取先生に向かう。その光の矢は時取先生が手をかざしただけでそれる。

「なっ！？（光の矢がだめなら風の矢で動きを止めた後に大きいのを）これならどうだ！！ラス・テル・マ・スキル・マギステル！！風の精霊17人縛鎖となりて敵を捕まえる魔法の射手・戒めの風矢！！」

時取先生に向かった風の矢は中程で方向を変え僕に向かってきた。

「（避けられない！）くっ！？どうやって僕の魔法を…？」

「教えるわけないだろ。ほらっ。待っててやるから早く抜け出せ」

完全に舐められているこうなったら全力をぶつけるしかない。

「こうなったら僕の全力を出します！！ラス・テル・マ・スキル・マギステル！！来れ雷精！！風の精！！雷を纏いて吹きすさべ南洋の嵐！！雷の暴風！！」

これが今の僕の全力！

「パワーが足りないな。魔砲「マスタースパーク」」

無情にも僕の魔法はあっけなく魔砲に呑み込まれた。

「2時間前に出直してきな」

「私の台詞……」

「で、こんな感じでいいのか？」

「ああ、ああいうタイプは一度圧倒的な敗北に合わせたほうが強くなる」

咲夜が入れた紅茶を飲みながらダラダラする。咲夜がな何か言ってる気がするが気にしない。

「そう言えば。どうやってばーやの魔法を操ったんだ？魔力が感じられなかったが」

「そう聞いて返り討ちに会った魔法使いはトリウムの崩壊系列の数より多いぞ。知りたきゃ力ずくで聞いてみる」

「私の台詞……」

「いや、やめておこう。開放状態でもお前に勝てる気がしない」

「じゃあ、俺は寝る。咲夜なんかあったら起こしてくれ」

「わかりました」

その頃のネギ

「僕の魔法がこうもあっさり。フフフフフフフ……死のう」

「あにきいいいい！？」

第二十二話　奇才VS天才

「今のお前はただの魔力タンクだ。膨大な魔力を使いこなすのにお前は圧倒的に経験が足りない。よってぼーやにはこれから纏静と戦い続けてもらう」

初耳ですが？

「なんで俺がそんなめんどくさいことを」

「経験を積ませるのには弾幕ごっこは最適だろう。死ぬことはないからな」

「だとしてもめんどくさい。こういうときには咲夜……がいなくなるとお茶が飲めない。ルーミア……は寝てる。どうしてこういう時に限ってあいつは。」

「やっぱりここにいたか。先生、聞きたい事が…」

よく来た！

「ネギ君に勝ったら教えてやるっ」

「せめて何かくらい聞けよ」

うるさい俺はだらだらしたいんだ。

「はあ。やればいいんだろやれば。制限は？」

「特にない。殺さない程度に遊んでやれ」

俺の代わりにマクダウェルが答える。

「ねえ、千雨ちゃんって強いの？」

寝ようとしたところに神楽坂が聞いてくる。……いたのか。

「まだまだ修行中だがネギ君より強いぞ」

「ふん」

そろそろ始まるな。

「行きます！ラス・テル・マ・スキル・マギステル！！風の精霊17人縛鎖となりて敵を捕まえる魔法の射手・戒めの風矢！！」

17本の風の矢が私に向かってくる。ある程度操れるようだけこのぐらいならいけるか。そう考えると向かってくる夜に向かって駆け出す。

「な！？」

グレイズ。弾幕ごっこでは必須技能らしい。まあ簡単にいえば紙一重でかわすということだ。先生のイージーよりも遅く少ないこの程

度でなら私もできる。

「くっ！ラス・テル・マ・sブッ！？」

詠唱を始めたネギ先生の顔に光弾を当ててカードを取り出す。

「友符「美しき鬼面仏心」」

目の前に桔梗が現れ金棒を構える。

「…しっかり防御してください」

「！？風花！風障壁！！」

ゴッ！！

桔梗が金棒を振りネギ先生が吹き飛ばされる。その後桔梗は私に笑いかけ消える。

「ご苦労さま。…悪いねネギ先生私の勝ちだ」

どぼん!!

「あにきiiiiiiiiiiiiiiiiiiii!?!?!」

まあ、死んではないだろ。

第二十二話　奇才VS天才（後書き）

スペルカード説明

友符「美しき鬼面仏心」

鬼灯桔梗を召喚する。召喚するといっても本人ではなく分身。

第二十三話　遠隔通信端末

海から引き揚げられたネギ君はまた落ち込みだしたがマクダウエルが何かを言つと急に元気になった。

「何、京都に父親が残した別荘があると教えてやつただけだ」

京都か、そう言えばもうすぐ修学旅行だしアレを買っておくか。……長谷川はどうしたかつて？以前作つた『箱庭』にいるよ。妖精や妖獣と契約中。まあ、上級妖怪くらいなら逃げられる實力があるし大丈夫だろ。

日曜日。

「ケータイを買いに行きます」

時取家には現在、俺、ルーミア、咲夜、桔梗、長谷川の計五人いるが。

「……ケータイ？」

「って一人も知らねーのかよ!？」

三人仲良く首を傾げ長谷川が突っ込みを入れる。

「正式名称、携帯電話。名前の通り持ち運びできる電話だ。まあ、遠くにいる人と会話ができる道具とでも思っておけ」

「そーなのかー」

幻想郷に電話はないから知らなくても無理はない。

「と、言うことで早速出かけるぞ。40秒でしたくしな！長谷川。案内は頼む」

「と、言うことでケータイを買いに来ました」

「わーい」

料金プランなどは長谷川に任せておいて俺達はケータイを見ておく。

十分ほどすると全員決まったらしく俺の所に集まってくる。

俺のはホトトギスの羽の色のような黒褐色。

ルーミアのは一見すると黒に見えるが夜のように深い青色。

咲夜のはいつも持ってる銀時計と同じ銀色。

桔梗のは鬼灯のような赤色。

機種は全員一緒に最新版のひとつ前の機種でそろった。

その後、長谷川から通話やメールなどの使い方を教わり家に帰った。

『夕飯ができました。』

『そーなのかー。』

『…ご飯ができたそうです。』

「うれしいからってメールで話すなよ」

幻想郷の景色／寺子屋

幻想郷の人里にある寺子屋。人間と白沢との半人半獣である上白沢慧音が教鞭を執る幻想郷唯一の学習施設である。今回はそんな寺子屋の一日を見てみよう。

「それじゃあ今日の授業はこれで終わりだ。将太に隼人。明日は宿題を忘れるなよ」

資料をまとめ、口から白いものを出している二人に注意をして教室から出る。

「先生さよならー!」

「ああ、さよなら。気をつけて帰るんだぞ」

「はい！」

「ふう。まったく元気なものだな…」

窓の外で手を振る生徒に手を振り返し寺子屋の居住スペースへ向かう。

「ルーミアはしっかりやっているだろうか？」

「邪魔してるよ」

せんべいをかじりながら新聞を読んでいるのは藤原妹紅。私の親友だ。勝手に入っているのはいつものことなので何も言わない。

「何を読んでいるんだ？」

「妖怪の賢者の不祥事について」

授業で使った資料を片づけ妹紅の向かいに座る。

「何か気になることでもあるのか？」

一つもらつぞ、と妹紅が持ってきたであろうせんべいをかじる。

「纏静は別にいいとして後の二人はどうしてるのか気になってな」

「ルーミアと咲夜なら外の学校、寺子屋と似たような場所に通うらしい」

「なんで慧音が知ってるんだ？」

「一応纏静が外にいつてる間はルーミアの保護者だからな」

それにしてもルーミアは無事だろうか。何でも外の学校ではいじめが横行してるらしいじゃないか。ルーミアがいじめられたらどうしよう。あの子は純粹なんだいじめなんて受けたら心に傷を…。

「ま、纏静もいるし大丈夫だろ。眉間に皺よってるぞ」

妹紅に眉間をつつかれ自分が考え込んでしまっていたことに気付く。

「それもそうだな」

「それじゃあそろそろ帰るよ。授業の準備もあるだろうしな」

そう言い玄関へ向かう妹紅。

「ありがとう。妹紅」

振り返らず手だけを振る妹紅の姿を見てから明日の授業の準備を始める。

「っおわ!？」

「どうした妹紅？」

玄関から聞こえた声に振り返るがそこには誰もいない。

「妹紅？」

繰り返し呼ぶ声は寺子屋に空しく響いた。

「あれ？今結界が揺らいたようなの？」

「あんたが最強の妖怪退治屋ですか？」

「いったいいつの話をしてるんだ。とっくの昔に廃業して今は焼鳥屋だよ」

第二十四話　不幸

「お願いします！修学旅行の間お嬢様を守ってください！！」

俺とマクダウエルに土下座して頼みこむ桜咲。その顔を見ればどれだけ必死か、どれほど近衛が大事かは明らかだ。だから俺とマクダウエルは顔をあげさせ答える。

「「だが、断る」」

「な、なぜですか！？」

桜咲が慌てて理由を聞いてくる。

「なぜもなにも必要ないだろう。近衛と同じ班だろ？隣でずっと守ってやればいいじゃないか。それが護衛の仕事だろ」

「それは…」

俯く桜咲。

「それとも何か？護衛を俺達に任せて自分は修学旅行を楽しむつもりか？」

「そんなわけありません！！！」

立ち上がり怒鳴りながら自分の心の内を話し始める。

「あなた達にわかりますか！？禁忌とされ村人全員から嫌悪の目を向けられる恐ろしさか！あなたに達にわかりますか！？大切な人が目の前から消えるかもしれない恐ろしさか！あなた達にわかりますか！！？守りたい人を守れない悔しさか！！この胸の痛みがあなた達にわかるんですか！！！！？」

涙を流す桜咲の目を見返し言い返す。

「お前はわかるか？生きているだけで周りの者が死んでいく怖さが妹を守るために495年間妹を閉じ込めた姉の悔しさか。かつて共に暮らした者たちに裏切られる悲しさか。友たちを残して逃げてきたことに対する後悔か。愛する者に裏切られる怒りが。永遠を生きる孤独か。不幸なのが自分だけと思うなよ」

「けど！！！」

「自分の弱さを他人に背負わせるな。近衛を守りたいなら近衛の隣にいる。近衛に嫌われるのが怖いなら近衛を信じる。近衛と共に生

きたいなら自分の気持ちに嘘をつくな。安心しろ。近衛はこの程度のことです人を嫌う弱いやつじゃないよ。それはお前が一番わかっているだろう?」

「…失礼します」

そう言い出ていく桜咲。

部屋に戻り着替えもせずにベッドに倒れ込む。

「断られたのかい、刹那」

「ああ」

「で、どうするんだ？」

「ちょっと考えさせてくれ」

目を閉じる。

「…わかってはいるんだ」

第二十五話　京都へ行くころ

「起つきろー！」

ドスッ！

「がはっ！？」

慌てて起きると腹の上には満面の笑みのルーミア。時計を見てみると零時一分。

「こんな時間に何の用だ？」

「今日は修学旅行だから早く準備するの！」

準備なら昨日済ませただろと言いながらもう少し寝ようと布団をかぶろうとしたら布団が消えた。

「咲夜お前もか」

仕方なく起きて朝食という名の夜食を食べ、荷物の確認を何度も行い始発で集合する駅に行くとするでにマクダウェルがいた。もう何も

言っまい。

とりあえず移動中はルーミア、咲夜、長谷川、マクダウエル、茶々丸の班と一緒に遊ぶことにした。

「くくく、お前の強運もここまでだ。今度こそ私の勝ちだあ！ストリートフラッシュ！」

マクダウエルがハートの9、8、7、6、5を出す。

「悪いが運命は俺に味方している」

自分の手札をマクダウエルに見せる。

「ロイヤルストレートフラッシュ・・・だど？」

スピードの10、J、Q、K、Aをマクダウエルの目の前に置きマクダウエルが賭けていたお菓子をルーミアに渡す。

「わはー」

「なぜだ！なぜ勝てないんだ！」

まあ、能力使ってるからな。『運命を操る程度の能力』今のところゲームの勝敗くらいしか操れないけどな。もちろん札をいじってるわけではないので能力を知らない奴はいかさまをやっていると気付かない。気付くまで遊んでみよう。

「ノーペア」「ロイヤルストレートフラッシュ」

「ノーペア」「ロイヤルストレートフラッシュ」

「ノーペア」「ロイヤルストレートフラッシュ」

「ノーペア」「ロイヤルストレートフラッシュ」

「ノーペア」「ロイヤルストレートフラッシュ」

「ロイヤルストレートフラッシュ」

「……やってられるかあああああああ……」

マクダウエルがついに爆発した。

「なんだ！？六連続ノーペアって！！なんだよ！？七連続ロイヤルストレートフラッシュって！！自分の運のなさを笑えばいいのか！？お前の運のよさを称えればいいのか！？」

「マスター落ち着いてください」

「落ち着いてられるかあああああああ……！！茶々丸いかさまはなかったんだな！？本当になかったんだな！？本当はちよつとあつ

たんじゃないのか？いや、むしろお前が犯人か！！巻いてやる！巻いてやる！」

「あああ、マスターそんなに巻いてはいけません」

暴れているマクダウエルにそつとささやいてやる。

「…ばれなければいかさまじゃないんだよ」

「やっぱりなんかしたのかお前わあああああ！！！」

「ごふうっ！！！」

「ほゝおこれは朝から見事なコークスクリューじゃ」

「いやー素晴らしいですよ実に」

マクダウエルが暴れている間にカエルが大量に発生したり、殴り飛ばされた時に燕を巻き込んでしまったり、どつかの gentleman がマクダウエルのパンチに感心していたり、桜咲が目丸くしていたり、いろいろありましたがおもうすぐ京都です。

言い忘れてたけど鬼灯はお留守番です。

第二十六話　風呂

京都

目が覚めると京都にいた。新幹線の中で何かあったような気もしないわけでもないとも言い切れないがまあ大したことではないだろう。というわけで今は清水寺にいるのだが…。

「京都おーーーーっ！！！」

「そーなのかー」

「これが噂の飛び降りるアレ！」

「そーなのかー」

「だれかつ！！飛び降りれっ！」

「では、拙者が…」

「おやめなさいっ！！！」

テンションが高い！！！質素で静かな所がいいんじゃないか。これぞ、わびさび。日本の美意識の一つって…。

「見ろ、茶々丸！清水の舞台だ！飛び降りるぞ！」

「イエス、マスター」

お前らもか!!!

「いや、ほつとこつ」

「つて、ほつとくのかよ!?!」

「久しぶりに学園の外に出れたんだこれくらい多めに見てやるつぜ
.....めんどくさいし」

「本音が出てるぞ」

おっと失敗失敗。

「つーか、あんたはいつも通りだな」

だつてねえ...。

「ルーミアは寺より喰い物だし」

「咲夜は歴史に興味ないし」

「俺は立つ前から知ってるし」

「いや一人おかしい」

おかしいとは失礼な。

「ネットで行方居士と調べてみる。俺がふざけたときの話を書いてある」

「いやふざけたのかよ!？」

まあどーでもいい話だな。

「音羽の滝にでも行くか」

音羽の滝に着くと10人ほどが酔いつぶれていた。なぜに？

「ん…？なんかお酒臭くないですか？」

「あー！新田先生これは…」

「上を見てください。悪質ないたずらのようです」

屋根の上に酒樽を見つけたので新田先生に報告する。そっちは新田先生達の任せて生徒をバスに押し込みましょう。ぐっすり寝てるから旅館の見回りは楽になったけど。

「風呂は命の洗濯ね…。苦勞が風呂までついてくる場合どうすればいいのやら」

「あの、聞いてます?」

周囲の音を消す程度の能力と距離を操る程度の能力を使って自分の周りの音を消してネギとの距離を離し固定する。さて少し寝るか。

「ちょっと!?あれ?どれだけ歩いても近づくけない。時取先生!聞こえてますかー!……ダメだ全く反応しない。桜咲さんのことで相談したい事があつただけど」

「私がどうかしましたか?ネギ先生」

「実は…って桜咲さん!?どうしてここに!?!」

「どうしても何もお風呂に入る以外に何をするんですか?それと教員が入る時間はもう過ぎてますよ」

もうそんな時間!?!それじゃあ早く出なくちゃ。

「急がなくてもいいと思いますよ。ほとんどの人が酔いつぶれてますから。それと女性の体をじろじろ見るのはどうかと思いますよ」

「う、ごめんなさい！」

慌てて背中を向ける。

「（ねえ、カモ君どう思う？）」

「（ありや間違いねえ。やっぱり関西のスパイだ。油断したところをぶすつとやるつもりだぜ）」

「全部聞こえてますよ。私のことが気になるなら学園長に連絡してください。私がお嬢様の護衛であることがわかりますから」

お嬢様って？そのことを聞こうとしたら脱衣所から悲鳴が聞こえてきた。

「きゃあああああ！！！！」

「お嬢様っ！？」

今の声って木乃香さん？それじゃあお嬢様って…。

どうやらネギ先生は私を関西のスパイだと思ってたようだ。そんなことはどうでもいい、私はお嬢様をお守りできれば…。

「お嬢様！無事で…す…ね」

「あっせつちゃん」

「わはー」

「桜咲さん」

お嬢様をお姫様だっこしている咲夜さんにお姫様だっこされているお嬢様。式神であろう猿で遊んでいるルーミア。呆然としている神楽坂さん。切り刻まれた式神だっただろう紙切れ。アレ？咲夜さんがいれば私って必要ない？

目を覚ますとルーミアと咲夜が隣にいた。教員の時間は過ぎてるようだ。うだが周りを見ても他には誰もいない。

「もう少し命の洗濯をさせてもらうか…」

第二十七話　二羽の不死鳥

「1」

手札から3のカードを出す。

「これならいかさまなどできないだろう。2だ」

マクダウエル達の班に交じってダウトをしている。茶々丸は脳波や心拍数などで嘘がわかるので今回も審判だ。まあ、その気になれば運命を操れるんだがそんな無粋なことはしない。

「3なのだー」

「4です」

「5だ」

「な……6だ」

「ダウト！はっはっは。未熟者めが！」

マクダウエルが喜々とした表情でめくるが…。

「6…だと…？」

「そんなミスするわけないだろう」

まさかこうも簡単に引っ掛かるとは思わなかった。

「近衛が攫われたようだな。7だ」

何事もなかったかのようにカードを出すマクダウェル。気配を探ると旅館から離れてく気配が四つと進行方向に一つ。

「そーなのかー。8なのだー」

「大丈夫なんですか？9です」

「桜咲や神楽坂がいるから大丈夫だろ？10」

「ピンチになったら俺が行くから大丈夫だろ。11」

「そんな計画で大丈夫か？12」

「大丈夫だ。問題ない13」

「お嬢様は言っている。ここで負ける運命ではないと…。1」

「そんな余裕で大丈夫か？2」

「一番いい運命を頼む。…と、そろそろ行くか」

そう言いスキマに飛び込む。

「フフ……よおここまで追って来れましたな。そやけどそれもここまでですえ」

猿のきぐるみを脱いだ術師が巨大な階段の上で不敵に笑う。

「させるかつ！」

桜咲が駆けあがろうとするよりも術師の後ろから現れた白髪の女性が言葉を紡ぐ方が速かった。

「…送り火「京都大文字焼き」」

「スペルカード！？」

慌てて下がると巨大な炎から無数の火の粉が飛んできた。

「この程度っ！」

わずかな隙間を通り避けきれないものは剣で払う。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル。吹け、一陣の風！刹那さん下がってください！」

ネギ先生の言葉を聞き後ろに大きく下がる。

「風花・風塵乱舞！」

ネギ先生が放った魔法が巨大な炎を

「呼ばれず飛び出てえ…ぬおっ!？」

時取先生と一緒に吹き飛ばした。

「つて。時取先生!？」

「な、何や……!？」

びっくりした。まさかあんなところに出るとはレミリア恐るべし。
まあ、それはいいとして。階段の上に立つ彼女に言葉をかける。

「久しぶりだな。妹紅」

「久しぶりって…。私たちが生きてきた時間に比べれば数年なんて一瞬だろ。纏静」

第二十七話「二羽の不死鳥」(後書き)

スペルカード説明

送り火「京都大文字焼き」

名前通り巨大な大の字の炎から無数の火の粉が飛んでくる。

第二十八話　師弟

とりあえず

「近衛のことは頼むぞ」

後ろにいる桜咲が頷くのを確認する。

「妹紅。場所を変えるぞ」

「了解」

とある森の中。纏静と妹紅の二人は

「とりあえずねぎま」

「はいよ」

なぜか焼き鳥を食べていた。

「で、なぜこっちにいるんだ？」

屋台で焼き鳥を焼いている妹紅に話しかける。

「ああ、それなら私が来た後に閻魔さまから手紙が来た」

ポケットから数枚の紙を出して渡してきた。

「えゝ何々『私が監視していながらこのような事態になって申し訳ありません。二度と今回のようなことがないよう八雲紫には私からきつく言っておきます。本当に八雲紫ときたら（以下数枚八雲紫についての愚痴）とこんなことを言っても仕方ありませんね。今回のことは結界が揺らいだ時と同じ時に召喚されたためあなたがそちらに行ってしまったのだと思います。先の二名と同じようにこちらに戻る術は今現在ありません。なので時取纏静を頼ってください。彼は今麻帆良にいるはずです。上白沢慧音にはこちらから事情を話しておきました。無理はしないようにとのことです。それではこのへんで。今回は本当に申し訳ありませんでした』四季映姫・ヤマザナドゥより。か…」

うん。御疲れ様です。それと

「俺、幻想郷に帰ったら、雛に厄取ってもらうんだ…」

「待て、それは死亡フラグだ」

だってねえ。こんだけ厄介事があるとねえ。

「とりあえず、修学旅行の間はそっち側なんだろう？」

「ああ、たぶんお前らの相手させられると思うけどな」

気配を探り桜咲が近衛を助けたのを確認する。

「そろそろ戻るか」

「それじゃあ私も戻るよ」

屋台をスキマに戻し妹紅と向き合う。

「次に来る時は本気で来い。鈍ってないか見てやるよ」

「わかったよ。師匠」

旅館に戻るとマクダウェル達がいまだにダウトを続けていた。とりあえず妹紅の焼いた焼き鳥を渡し今日はお開きになった。

第二十九話　鹿

『いただきまーす!!!』

朝からテンション高いねこいつらは、それと…

「おっかわり、おっかわり、うっれしいな」

ほどほどにしとけよルーミア。

ルーミアが六回目のおかわりを食べ終えたところに朝食の時間が終わった。

「ネギくんツ！今日ウチの班と見学しよーツ！」

「ちよっ、まき絵さんツ！ネギ先生はウチの3班と見学をツ！」

「あ、何よーツ！私が先に誘ったのにーツ！」

「ずるーいッ！だったら僕の班もーツ！」

ネギ君大人気。まあ、俺はルーミア達と回るから関係ないけど。新田先生にも許可を取っているから修学旅行中は基本的にルーミア達と回ることになる。基本的にネギ君の仕事には口を出さない。昨日はノリで介入したが。とりあえずバスに向かうか。ベッ、別に悔し

「わかったのだ」

ルーミア、シカせんべいを鹿たちから強奪。

「纏静、助けて」(泣)

で、今に至ると。助けてやるか。密と疎を操る程度の能力で鹿の密度を減らす。そして長谷川がルーミアを呼ぶ。

「ほらさっさとこっちに来い」

「千雨」(泣)

「まったく、べとべとじゃねえか。ほらじっとしてろ」

「ありがと、千雨」

まったくこんな奴が人喰い妖怪なんてな。今だに信じられねえぜ。

「お前なら鹿ぐらい追っ払えただろうが」

「だって、纏静が食べちゃだめって」

「なぜその話が出てくる!？」

訂正やっぱ妖怪だこいつ。

「大丈夫なのか？」

「…ああ、さっきはすまなかつたな」

とりあえず移動するか。

さてどこに行くかな。おつ。あんなところに屋台が。

「あそこで腹ごしらえでもするか」

「わはー」

「てかなんでこんなところに屋台があるんだ!？」

「妹紅、ツケで頼む」「ツケで」「ツケでお願いします」

「「「いや、第一声がそれかよ」「」」

第三十話　竹取物語

健康マニアの焼き鳥屋にて

「妹紅、ツケで頼む」「ツケで」「ツケをお願いします」

「「いや、第一声がそれかよ」「」

幻想郷出身の三人の言葉に不老不死、吸血鬼、魔法使い見習いがつつこむ。つつこみながら一人は焼き鳥を焼き二人は席に着く。

「つーか先生昨日敵になっただって言ってなかったか？」

焼き鳥を食べながら長谷川が聞いてくる。

「こんな昼間から戦うわけないだろ。それにここにいることでお互いに仕事してるんだよ。俺達は予定外の戦力である妹紅が向こうに行かないように牽制してるし、妹紅も強敵である俺達を牽制してる……………という大義名分のもとでサボってるんだよ」

「最後の一言で台無しだぞ」

「まあいいじゃないか、その通りなんだから。そっちの三人は初めてだよな？健康マニアの焼き鳥屋の藤原妹紅だ。まあ、よろしくな」

「魔法使い見習いの長谷川千雨だ。よろしく」

「真祖の吸血鬼のエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルだ。こっちは私の従者の」

「ガイノイドの絡繰茶々丸です。よろしく願いします」

「魔法使いに吸血鬼に………がいのいどって何だ？」

「河童以上の科学力で作られた体を持つ式神だ」

「ああ、なるほど」

「「その説明でわかるのか！？」」

何を驚いてるんだ？これ以上ないほどわかりやすい説明だろ？

「…まあいい。で？お前はなんて言う妖怪なんだ？それほどの力を持つているんださぞかし有名な妖怪なんだろう？」

マクダウエルの言葉にきよんとする俺と妹紅。

「いや妹紅は人間だぞ」

「まあ妖術は一応使えるが種族で言えば人間だよ、私は。まあ普通の人間ではないけどね。………少しばかり昔話をしようか？」

そう言い自嘲気味に笑い話し始める妹紅。

今から千三百年くらい前かな？私が住んでいた都にある噂が流れ始めたんだ。たぬきのみやうこ讃岐造の屋敷にこの世のものとは思えない程の美しさを持つ姫がいると。その名前は

かぐや姫

それからというものの世間の男という男がかぐや姫に結婚を申し込んだ。もちろん私の父様もだ。もちろんそんなに簡単に結婚できるはずもなくほとんどの者が一目会うこともなく諦めた。父様もこの時諦めてくれればよかったんだけどな。残った五人にかぐや姫は五つの難題を出した。

「仏の御石の鉢」「蓬萊の玉の枝」「火鼠の裘」「龍の首の珠」「燕の産んだ子安貝」

父様が言われたものは「蓬萊の玉の枝」だった。

「蓬萊の玉の枝か…。車持皇子…いや藤原不比等か？」

知ってるのか…。なら少し短くするか。誰一人難題を解くことができずかぐや姫は月に帰ることになった。多くの人がかぐや姫を守ろうとしたが月人の見たこともない攻撃で全ての者が地に伏した。…私の父様も…。かぐや姫がいなくなった後私は家族の人生を狂わせたかぐや姫に復讐することを決めた。…いやそんなじゃないな。子供の嫌がらせだ。

私はかぐや姫が大切な人のために残した壺を奪おうと決めた。岩笠という名前の男はその壺を持ちこの国で最も高い山に数名の兵士を連れて登る後をつけた。…子供の体力で大人について行けるわけもなく八合あたりで私は力尽きた。私が付けてきたことなんてとづくにわかつていた岩笠たちは私を励ましながら一緒に山頂に登った。

勅命により岩笠が壺を火口へ投げようとする時そいつは現れた。

木花咲耶姫

咲耶姫は壺を投げようとしていた岩笠を止め言った。その壺を燃やしてはいけないと。その中には不老不死の薬があると。その言葉を聞き壺の中身を知っていた岩笠以外の者たちは動揺した。その夜は異様な空気に包まれたよ。まあ山を登った疲れで私は眠ってしまったんだけどね。

次の日、私と岩笠は咲耶姫に起こされて言われた他の者たちは薬を奪い合って死んでしまったと。私達は血の海に沈んだ焼け爛れた死体を見ながらその言葉を聞いていた。そしてその薬は妹がいる八ヶ岳に捨てるように言った。

酷く暗い雰囲気の中会話もなく下山をしていた私はここに來た目的を思い出し岩笠が背負う壺を見て魔が差してしまった。

気が付けば私は急な下り坂で命の恩人の岩笠の背中を蹴り飛ばしてたよ。そして壺を奪って逃げた。

あの時の私はどこに逃げようとしてたんだろうね。もう帰る場所もなかったのに…。

第三十一話　千年越しの賭け

蓬莱の薬を飲み不死になつてから三百年。隠れて生きるのに疲れた私は妖怪を片っ端から退治していき自己を保っていた。そんな生活をしていた私はその日立ち寄った村である噂を聞いた。東の山には人の皮をかぶった妖怪が住んでいると。明日にでも山に行こうとしていた私はある村人の言葉を聞き夜の山に入つて行つた。

曰く、不死である。

三百年の間に覚えた妖術で火をともしながら山の中を歩く。しばらく獣道を歩くと開けた場所に出た。そこにあつたのは空を隠すほどの大きな樹とその横にある小さな小屋だけだった。私は少しの期待と共に戸を開けた。そこにいたのは…。

「まあ、そこから紆余曲折あつて今に至るわけだよ」

「だいぶはしよつたな!？」

「むしろそこが大事だろ!さつさと吐け!」

「文句いつてないでさつさと戻るぞ。もうすぐ集合時間だ」

そう言い纏静が吸血鬼を引きずって行く。私はルーミアに持ち帰り用の焼き鳥を持たせさっきまで纏静たちが座ってた椅子に座る。

「またね〜もこー」

ルーミアに手を振り返し自分用に取って置いた焼き鳥を食べる。

「あれから千年か…」

目を瞑り千年前を思い出す。

「あら？人間のお客さんなんて珍しい。何か御用？」

一番初めに思っただのは…

「まいいわ。丁度夕御飯の支度が終わったからあなたも食べるですよ？」

人の話を聞かない奴だな…。

「で、何の用でしたっけ？」

夕飯を食べ終わり後片づけを終えたところで初めてそう聞いてきた。

「死なない奴がここにいて聞いている」

「ふん。で、実際に見た感想は？」

どっからどう見ても

「ふつうの人間だな」

「残念ね。私は妖怪しでの鳥よ」

「へえ。なら丁度よかった」

「ん、何が？」

手に炎を纏わせ殴り掛かりながら言う。

「私は妖怪退治屋なんだよ」

「喧嘩する相手はよく見なさい」

その声を聞いた瞬間私は何かに吹き飛ばされ気付いたら星空を見上げていた。

「痛っ！？」

痛む右腕を見るといつか鬼にやられた時のようにぐちゃぐちゃにな

っていた。でも私には関係ない。不用意に近づいて来た女に右の貫手を放つ。女は避けようとするが脇腹を抉る。

「そう。そういうことなの」

女が私の右腕を見ながら言う。

「あなたも死ねないのね」

「ああ、そうだよ。私は蓬莱の薬を飲んだ蓬莱人だ」

時間が戻るように再生する女の脇腹を見ながら言う。

「で、これからどうするの？永遠にここで私と殺し合うつもり？」

「それは……死んでから考えるよ！……！」

そこからは一方的だった。私の攻撃は届かず、あいつの言葉が私の胸に何度も突き刺さる。

「そうやってすべて撥ね退けても辛いのは自分よ？」

「うるさい……！」

そんなことはわかってる。

「あなたを受け入れてくれた人もいたでしょう？」

「うるさい!!」

そいつらも私を置いて逝った。

「こんなことを続けても誰も許してくれないわよ?」

「うるさい!!」

許なんていらぬ私が欲しいのは罰だ。

「…馬鹿ね」

目の前が真っ暗になった。

「……ここは?」

知らない天井。ここはあいつの家?

「目が覚めた？」

「どういづつもり？」

「どうもこれも敗者は勝者に従うものよ」

「私に何をさせるつもりよ？」

「理想郷を作るのを手伝って欲しいの」

「理想郷？」

「人も妖怪も半妖も神も蓬萊人も全てを受け入れるそんな場所」

「ハッ！馬鹿馬鹿しい。出来るわけないだろう」

「そんなに言うなら賭けをしましょう。千年。千年たった後も私が言う理想郷ができないと思ったならあなたの願いを一つ叶えてあげる」

「なら……」

「賭けはお前の勝ちだよ。纏花。私はまだ生きていたい」

『なら…私を殺してくれるかい？』

『千年たってもそんなこと言ったら殺してあげるわよ』

if story ー永遠の終わりー

人里の人達が黒い服を纏ってある家に集まっている。皆悲しみにく
れ涙を流す中一人だけ涙を見せず黒い枠の中にいる女性の笑顔を見
つめている。赤と白の服を着ていた彼女は女性の笑顔に何か呟くと
その家を後にした。

博麗神社

「あつ。妹紅さん。どうしたんですか？」

長い階段を上りきると境内を掃除している巫女に話しかけられた。
何代か前のあいつの印象が強すぎて巫女の名前は未だに覚えられな
い。

「ああ、博麗の巫女か。纏静はいるかい？」

「時鳥様なら無縁塚に行きましたけど…」

無縁塚？あんなところになんかあったか？

「とりあえず行ってみるよ。修業がんばりなよ」

「はい！」

元気に返事をする巫女に手を振り階段を下りていく。

「あいつもこのくらい素直だったならよかったのにな」

元気に返事をするあいつを想像する。そう言えば…

「賽銭入れた時は素直だったな」

無縁塚

魔法の森を抜け再思の道を歩き紫の桜が舞い散る中纏静は大きめの石が立ててある場所に手を合わせていた。

「外人か…」

無縁塚にあるほとんどの墓が幻想郷とは縁のない外から来た人の墓である。人知れず迷い込み人知れず消えて逝く。しばらくその様子を見ていると纏静が振り返り話しかけてきた。

「どうしたんだこんなところで？」

「ああ、ちょっと纏静に殺してもらおうと思ってね」

そう言うと纏静は困ったように笑い呟いた。

「まさか慧音の言った通りになるとはな」

「慧音が？」

詰め寄る私の頭を纏静は少し落ち着けと二、三度軽く叩いた。

「人妖継想神たる我が預かった上白沢慧音の言葉だ。心して聞け」

似合っていないぞと呟きながら姿勢を正し纏静の言葉を待つ。

「『この言葉を聞いているということはお前は纏静に「殺してくれ」なんて無茶なことを言ったんだろ。私にはわからないとも思ってたか？残念ながらお前のことは私が一番知っているんだ。これくらいわかるさ。そんなお前に言いたい事がある。死なないでくれ』」

慧音にそんなこと言われたら私は…私は…。

「『と言いたいが、私は妹紅に苦しんでまで永遠に生きていて欲しくないだから』」

「『人としてしっかり生きて、やりたい事を全部やって、たくさん笑って、しっかり死んでから私のところ来い。待ってるぞ』」

「け…いね…」

「泣くなよ。たくさん笑えって言ってただろうが」

「泣いて…ない。…慧音の言葉で心が溢れてるだけだ」

そう言つと纏静に引き寄せられ抱きしめられた。まったく、二人の想いはちつぽけな私の心には大きすぎるよ。だから…

「

」

少しくらいここで眠ってる奴らに分けてもいいよな…。

「妹紅。お前の永遠。俺が受け継ぐ」

纏静が何か言ってたが私の声にかき消されてよく聞こえなかった。

「久しぶり。慧音」

「久しぶりだな。妹紅」

死を知らなかった少女が死を知り友と再会する。そんなあるかもしれない未来。

第三十二話　頭突き

「くちびる争奪！修学旅行でネギ先生&時取先生ラヴラヴキス大作戦！！ルールは今夜中にネギ君か時取先生に熱いキスをするだけ！武器は枕のみ、それ以外は何も言わない！新田に見つかっても全員他言無用だよ！」

茶番が始まった。

「というわけで匿ってくれ」

「参加すればいいじゃないか。小娘とキスし放題だぞ？」

マクダウェルがそう言ってくるが

「めんどくさい。こっちの魔法は嫌いだ。俺と口づけなんて百年早い。めんどくさい」

「めんどくさいって二回言ったぞ」

「大事なことからな」

ああ、めんどくさい。めんどくさい。

「見つけたアル！」

「ニンニン」

扉を開け格闘バカと忍者バカが入って来た。ほんとにめんどくさい。

「お前達には三つの選択肢がある。俺に殴られてからロビーで正座するか、俺に蹴られてからロビーで正座するか、俺に頭突きされてからロビーで正座するか。さてどれがいい？」

「どれもいやアル！先生に勝って唇をもらうアルよ！」

ガシッ！！

「は、早いある！？」

「慧音直伝……」

バカの顔を目の前に持つてきて思いつきり…

ズゴンッ！！！！

「ぴぎい！？」

口から白いものを出してるバカを後ろに放り投げ次の目標に目を向ける。

「覚悟はいいか？」

「拙者は古みたいに頭は固くないから遠慮するでござる。御免！」

ガシッ！！

「安心しろ。死にはしない。むしろ頭が良くなることはないこともないと極一部で噂されてないこともないと思っただような気がする」

「不安しないでござる！というより痛いことには変わりないんでござるう！？」

「その通りだ」

「はぴい！？」

物言わぬ二人をロビーに引きずって行く。

「凄まじい威力だなあの頭突きは」

「け・ねの頭突きはもつと凄いよ？」

「あれ以上にか！？」

「うん。皆小町にあって来たっていつつも言ってる」

「小町？」

「三途の水先案内人です」

「三途つて…臨死体験かよ!？」

ロビーに行くほとんどの生徒とネギ君が正座していた。主催者である一人と一匹に物言わぬ二人を置きながらいい笑顔で笑いかけてやったら真っ青になりがたがたと震えていた。とりあえず明日にでも頭突きを喰らわしてやろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9197t/>

幻想郷から来た時鳥

2011年11月5日19時32分発行